

## ルネサンスにおけるキケロ主義論争

榎 本 武 文

### 序論 人文主義と「キケロ主義」

人文主義運動の性格と目標／古代研究・修辞学・模倣／キケロ、人文主義者の英雄

### 一 ポリツィアーノ対コルテージ

人文主義者ポリツィアーノ／ポリツィアーノの模倣論／ポリツィアーノとコルテージの往復書簡／

パオロ・コルテージとローマのキケロ主義

### 二 ジャンフランチェスコ・ピコ対ベンボ

Giff・ピコの哲学／ピエトロ・ベンボ／往復書簡の哲学的含意

### 三 エラスムスとその後

『キケロ主義者』の背景／『キケロ主義者』の分析／エラスムスへの反応

補遺 『キケロ主義者』アムステルダム版テキストの正誤表

## 序論 人文主義と「キケロ主義」

## 人文主義運動の性格と目標

いわゆる「ルネサンス」の重要な一要素である人文主義は、十三世紀末葉から十四世紀初頭の北部イタリアに淵源し、十五世紀に到ってイタリア全域に拡がり最盛期を迎えたのち、十六世紀にはフランス、ネーデルラント、イギリス、ドイツ等北ヨーロッパへも伝播した。それは、独立した学問的現象として重要なだけでなく、その他の知的領域、すなわち哲学、文学、美術、建築、音楽、政治などにも決定的な影響を与えた、幅広い文化的運動として捉えなくてはならない。しかし、狭義の人文主義を概括するなら、おおよそ以下のように叙述できるであろう。十五世紀初めから、古代ローマの文学・歴史に対する関心の一層の増大、および古代ギリシア文学の写本の東方からの流入によって、フィレンツェ、ヴェネツィア、ローマ、ミラノ等イタリアの諸都市に、数多くの傑出した人文主義者が出現し、文学、修辞学、詩学、歴史、道徳哲学を含む、人文学研究 (*studia humanitatis*) が興隆した。こうした人文主義者は、ラテン語文献の本文校訂・注釈、ギリシア語文献のラテン語への翻訳を行ない、世紀中葉以降には、両者の活版印刷による普及を促進するとともに、徐々に大学の内部にも勢力を伸ばしていった。<sup>(1)</sup>

古代の文献を研究する上で人文主義者の用いた手法は文献学である。彼らはまず、中世の西ヨーロッパには広く知られていなかった古代ローマ文献の写本を修道院の図書室などに「発見」して(ギリシア語の写本はもちろん東方から新たに移入して)収集し、既知の文献についても、種々の写本を比較校合してより良い写本・異読を特定しようとした。印刷術の発明以降は、それらの文献が大量に複製されて広範囲に伝播した。その結果、ローマ(やや遅れてギ

リシア)の古典が、ほぼ現在伝わる形態に固定された。人文主義者は同時に、言語としてのラテン語を研究して、中世の「野蛮な」ラテン語と古代ローマの「純粋な」ラテン語とを峻別しようと努力した(ギリシア語は中世西ヨーロッパで汎用されていたわけではないから事情が異なる)。かくして、人文主義は一種の歴史的・批判的性格を特徴とする。人文主義者は、諸写本の年代を判定してその先後関係を確定し、古代ローマの真正な語彙・語法を「墮落した」中世のそれから選り分ける必要があったからである。<sup>(2)</sup>

ここから明らかになる人文主義のもう一つの特徴は、中世・スコラ学への反感である。古代ローマのラテン語を理想とする人文主義者から見れば、スコラ学者のラテン語は稚拙で貧しいまがいのものである。また、論理学者の瑣末な討論は、人間が本来なすべき「人間性の研究」<sup>ストライプ、フマニタイス</sup>には無関係な詭弁でしかない。ペトルルカを嚆矢とする人文主義者の言説の目立った特質の一つは、スコラ学とそのラテン語とに対する戦闘的な罵詈雑言である。この反撥には、純粋に知的・美的な理由の他に、いわば知識の「ヘゲモニー」をめぐる敵対意識という動機もあったであろう。十五・十六世紀に到ってもなお、ヨーロッパ各地の大学は、中世的伝統に根ざした法学・医学・神学の研究を中心とする、スコラ学者の牙城だった。人文主義者は、ごく少数の例外を除けば、文法学・修辞学やギリシア語を教える比較的地位の低い教師として、少しずつ地歩を築いていったにすぎない。一方、由緒ある学問を教授する、地位の安定したスコラ学者には、人文主義者は成り上がりの扇動者と思われたに違いない。<sup>(3)</sup>

しかしながら、人文主義者の目標は、もちろん、文献学の技術的洗練、中世および中世の学問的伝統を体现するスコラ学に対する攻撃にとどまったわけではない。人文主義運動の原動力として、われわれは、現在「ルネサンス」全般の性格と考えられているような、古典古代の価値体系への回帰の意識的努力を特定することができるだろう。人文主義者に限定して言えば、彼らは、古代の自由市民にふさわしい「徳」(virtus)を中心とする倫理的価値を復活し

て自ら吸収すること、そのための手段としてギリシア・ローマの雄弁 (eloquentia) を体得することを目指した。とりわけ十五世紀前半までのフィレンツェは、共和制政体をとっていたため、共和制ローマへの共感が強く、その雄弁家の代表格であるキケロに大きな関心を寄せていた。確かに人文主義者は、都市の書記官、権力者の秘書、大学教師としての職務上、記録文書や外交上の書簡や開講演説において雄弁な表現技術を必要としたが、この技術を習得する上での(少なくとも)大義名分として、倫理的価値の裏づけがあったことを見逃してはならない。注意すべきもう一つの点は、古代の異教的価値体系とキリスト教信仰との関係である。これは微妙な論点であり、また個々の場合で異なるが、大方の人文主義者は、キリスト教を捨てて古代の倫理的価値を採用したのではなく、両者を共存させた。人文主義の文献学的方法が当時の哲学研究に深い影響を及ぼしたように、十五世紀においてさえ、人文主義的神学が存在したのである(十六世紀の宗教改革と人文主義との関連については言うまでもない)。いずれにせよ、古代の雄弁な表現を習得するには文献学の産物である古典テキストが必要であり、学者としての知見の公表を含めて自らの思想を表現するためには洗練されたラテン語の知識が不可欠だったから、人文主義者にとって、この二つの活動は表裏一体をなしていた。

#### 古代研究・修辞学・模倣

都市の書記官長や書記官、諸侯や教皇の秘書、また教師や文献学者としての職務において、人文主義者が主に用いた言語はラテン語だった。彼らは読者として古代ローマの書物を読み、書き手としてそうした書物の言語の特徴を忠実になぞった古典的ラテン語を書こうと努めた。また、人文主義者の著作のジャンルは、外交や講義のための演説、庇護者や友人・同僚宛の書簡、都市の歴史、対話篇を含む道徳哲学の論考などであり、それぞれローマの古典に先例

を持つている。つまり、古代を研究するための読書の対象となった書物は、すなわち、自らが執筆する際に手本とするべき素材だったことになる。人文主義者は単に古典を復活させたのではなく、復興した古典を独自の創造の出発点にしたのである。人文主義運動を考える上で、この古代研究の二重性は重要である。

どのジャンルにせよ、古典ラテン語で著述するためには、この言語の周到な知識だけでなく、正しく書き、話すための規則、すなわち修辞学 (rhetorica) に熟練する必要がある。それは、模範となったローマの古典文学そのものが高度に修辞学的な文学だったことから当然である。古代の修辞学理論書は、すでに中世にも偽キケロの『ヘレンニウスに与える修辞学書』やキケロの『想案論』などが知られていたが、十五世紀初頭に、クインティリアヌスの『弁論家の教育』(一四一六年)、キケロの『弁論家について』、『弁論家』(一四二一年)といった重要な文献の完全な写本が発見されて、広く読まれるようになった。特にクインティリアヌスは、体系的・包括的な修辞学教育を指示する書物として、十五世紀中葉以降大きな役割を果たすことになる。中世スコラ学者の言論を支配していた論理学に對抗して、人文主義者は優雅に書き、話すための技術 (ars elegantior loquendi)、修辞学を顕揚した。修辞学を体得して雄弁に言葉を使う人間は (すなわち人文主義者は) —— 職業の種類にかかわらず —— 「弁論家」(orator)、その言説は —— 書くと言すとに区別を設けずに —— 「弁論」(oratio) と呼ばれた。<sup>5)</sup>

しかし、手本である古代のローマ文学に比敵しうる作品を書くためには、古典ラテン語の文法・語法と修辞学とを単に知識として習得するだけでは十分ではない。優雅ではないが実用的な言語として伝承されてきた中世ラテン語とは異なり、そこから意識的に断絶した古典的<sup>6)</sup>人文主義的なラテン語を使いこなすには、どうしても古典の中に何か特定の模範を選びとり、それを具体的に模写する必要がある。そうしたわけで、人文主義者の創造行為の重要な原理は、(逆説的なことに)「模倣」(imitatio)なのである。ペトラルカを初めとして、人文主義者は、例外なく、語

彙・語法、構文のレヴェルから、(散文を含めて)韻律、定型句に到るまで、古典作品を模倣してラテン語を書くことを学んだ。学業の始めから、彼らはテキストの傍らにノートを置いて、記憶すべき単語や言い回しを書きとめるといふ読書法をとったのである。<sup>(6)</sup>当然、この原理に基づく執筆法に秀でるには、才能だけでは不十分であり、時代の経過につれて蓄積される古典ラテン語の知識の吸収が必須であった。そのことは、たとえば、十四世紀のペトラルカ、十五世紀前半のレオナルド・ブルーニ、世紀後半のパオロ・コルテジを、文体の上で比較してみれば明瞭になる。<sup>(7)</sup>時代を下るに従い、人文主義者の書くラテン語はより古典に忠実になっていった。当時のラテン語の書き手に対する最大の讃辞は、古典作家と区別がつかないというものだった。また、書き手の側が、後の世代になればなるほど、模倣を容易に感じ、関心を模倣から創造へと移していったことも予想に難くない。<sup>(8)</sup>

さて、本論の主題である「キケロ主義」に話題を移す前に、以上に略述した人文主義運動の代表的なマニフェストとして、ロレンツォ・ヴァッラ (Lorenzo Valla, 一四〇七—一四五七) の主著の一つ、古典的語法の規範を定める書物として十五・十六世紀に大きな名声を博した、『ラテン語の典雅』(*Elegantiae linguae Latinae*, 一四四一—一四九九年頃執筆)の「序言」を見ることにしよう。全六巻への「総序」で、ヴァッラはまず次のようにラテン語を称揚する。われわれの祖先たるローマ人よりも広範に、また長く他民族を支配した帝国は他にもあった。しかし、これほど広く自らの言葉を伝播させた人々がいただろうか。言葉は戦争とは違って文明の恩恵や調和を伝えるものであり、金の指輪に添えた宝石がその美しさを増すように、ラテン語は土着の俗語に光輝を与えたのである。確かにわれわれはローマ帝国の支配を失った。だが、言葉によっていまだに世界の大きな部分を支配しているのだ。イタリア、ガリア、ヒスパニア、ゲルマニア、パンノニア等々多数の民族はわれらのものである。「なぜなら、ローマの言葉が権勢をふるう場所には必ずローマの支配が存するのだから」(*Ibi namque romanum imperium est ubicumque romana lingua*

dominatur)。多数の方言に分かれたギリシア語と異なり、ローマの言葉は単一であり、その中に自由な人間にふさわしいすべての学問が包含されている。「最高の哲学者、弁論家、法律家、文筆家とは誰だっただろうか？ もちろん、巧みに話す技術に最高の熱意を抱いた人々なのである」ところが、現今のラテン語は、「かつてローマがガリア人に占領された」(quo olim Roma capta a Gallis)とどのような状態にある。何世紀にもわたって、ラテン語を話す者はおらず、読んでも理解することすらできない。そのために自由学芸のみならず、絵画・彫刻のような諸技芸も、墮落し、ほぼ死に絶えている有様である。こうして中世におけるラテン語と雄弁の没落を嘆いた後、ヴァッラは同志の人文主義者に熱烈な勧奨を行なう。「ローマ市民よ……諸君は一体いつまでわれらの都を——というのは支配の座ではなく文芸の生みの親のことを言っているのだが——ガリア人に占領されたままにしておくのか？ つまり、純粋なラテン語 (Latinas) を野蛮な言葉に蹂躪させておくのか？ あらゆるものが冒瀆されているさまを、いつまで無情な、ほとんど不孝な目で眺めているのか？」

第三卷の「序言」は、『ユスティニアヌス法典』の純粹で優雅なラテン語を称讃した後、矛先をスコラ法学者に向ける。法律が言葉の解釈にかかっている以上、こういう法学者はローマ法の五分の一も理解できないでいるが、自らの無能を隠すために、雄弁を好む人間には法学を修得することはできない、などと言う。「だがなぜこの人々について話す必要があるのか？ 私は公言する、凡庸な才と文芸の知識しかないこの私でさえ、ローマ法を講釈する連中全員に彼らの学問を教えてやれるだろう」。このような人々はゴート族・ヴァンダル族であって、ローマを侵略した後、その支配とともにゴート語を残していったのだ。しかし、ローマ法は、大学で講じられている他の学問に比べれば、黄金のようなものである。教会法はその大部分がゴート族の産物である。哲学者の著す書物は、ゴート族やヴァンダル族にさえ理解できない。スコラ学的な文法学者・修辭学者について言えば、前者はラテン語を忘れさせることが目

的であるように見えるし、後者が教えているのはゴート語を喋ることにほかならない。<sup>(10)</sup>

第四巻の「序言」の冒頭では、ヴァッラは、夢の中で神に「キリスト教徒ではなくキケロ主義者である」(quod ciceronianus foret, non christianus) ことを責められたという聖ヒエロニユムスの有名な挿話を引用している。回心したヒエロニユムスは、今後は世俗の書物を読まないことを誓ったのだった。この誓いを、雄弁の研究の放棄と解釈する人もいるが、歴史であれ、道徳哲学であれ、要するにすべての学問を論じた書物は、雄弁なものである。「こうして、雄弁な書物を読むのでなければ、書物は一冊も読んではならないということになろう」(Ita aut eloquentes, aut nulli libri legendi erunt)。ヒエロニユムスの挙げた二人の異教徒、プラトンとキケロは、いずれも哲学者でも「弁論家」でもあった。ならば、ヒエロニユムスに害をなしたのはキケロの修辞学ではなく哲学だったと考えてはいけない理由があるだろうか？ 哲学と修辞学とを比較して論じた人々は、前者はキリスト教と調和せず、あらゆる異端説の源泉だったが、後者には称讃すべきものしかないことを示している。そもそも、ヒエロニユムス以上に雄弁な書き手がいるだろうか？ だから、彼は雄弁の追究をやめることはなかったのだ。アンブロシウス、アウグスティヌス、ラクタンティウスなど、古代の他の神父たちも同じことを行なった。彼らは「いつの時代にも、神的な言葉〔神学〕のかの貴重な宝石を、雄弁の黄金や白銀で包み込み、一方の学問のために他方を放棄しはしなかったのである」。ヴァッラによれば、雄弁術に無知な人間は神学について語るべきではない。「優雅に話す術を知らぬにもかかわらず、とりわけ神学において、自らの考えを書きとめる者は、きわめて厚顔である。もし熟慮した上でそうするのだと言うのならば、彼はまったく気がふれているのである」。結論としてヴァッラは、異教徒の書物を涉獵して糧とした神父(veteres illi theologi)を、花の間を飛び回って甘美な蜜をつくる蜜蜂に喩え、スコラ神学者(recentes)を、食物を盗んで巣に隠す蟻に喩えている。<sup>(11)</sup>



『ラテン語の典雅』の「序言」で用いられている表現は、人文主義者の中でもひととき戦闘的な人物だったヴァッラらしく攻撃的なものだが、このような古代ローマ文明との一体感、古典ラテン語とその修辞学の習得への熱意、中世的伝統を継承する大学のスコラ学者への敵意は、多かれ少なかれ、他の人文主義者にも共有されていた。人文主義運動は、こうして古代への新しい情熱にあふれて出発し、発展したのである。

### キケロ、人文主義者の英雄

古代ローマ文明を復興させようと望んだ人文主義者たちがその模範の筆頭として選んだのは、共和制末期の政治家・雄弁家マルクス・トゥリウス・キケロだった。第一に、修辞学にかかわる分野で、キケロは、政治演説、法廷弁論、修辞学理論書、近親者宛の書簡を大量に残したが、それだけでなく、獨創性には欠けるが哲学者として、道德哲学の論考や、ストア派、エピクロス派、懷疑派の学説を伝える書物を著した。キケロは、人文主義者に、雄弁と哲学とを一身に結合した存在と考えられたのである。第二に、前述したとおり、十五世紀前半のフィレンツェのように共和制的政体をとる都市の人文主義者、たとえば書記官長を務めたレオナルド・ブルニから見れば、共和制ローマの擁護者キケロは、政治への参加という「活動的生活」を人文主義者の重要な領分と見なす「市民的」人文主義にとつて、偶像のような存在だった。<sup>(12)</sup>これはいわば倫理的権威の裏打ちである。第三に、キケロは修辞学的模倣を行なう際の文体上の最高の理想とされた。修辞学教育に適した著作を、他の著作家とは比べものにならないほど数多く人文主義者に伝えたキケロは、いわゆる「総合文」(perihodos, circuius)を交える、変化に富む円熟した文体で書いた。学校教育においてラテン語読解と模倣の教材に用いるには、キケロは格好の作家だった。また、とりわけ初級の段階では、複数ではなく単一の模範を選ぶことが指導上の便宜でもあったであろう。<sup>(13)</sup>すでに紀元一世紀のクインティリア

ヌスにおいて、弁論家としてのキケロは最高の讃辞を与えられており（キケロは「もはや人間ではなく雄弁の名前」(tam non hominis nomen sed eloquentiae) であるという）、韻文におけるウェルギリウスと並んで、修辞学教育のための実例に最も頻繁に引用されている<sup>(14)</sup>。少なくとも十五世紀前半の人文主義者にとって、キケロに比敵する散文作家は、古代ローマ文学には存在しないと思われたに違いない。

本論は「キケロ主義」を主題とするが、この言葉には二つの限定が必要であろう。まず、以下に論じるのは、修辞学的・文体的なキケロ主義であって、他の領域におけるキケロのルネサンスへの影響は扱わない。哲学や政治思想の分野でのキケロ受容史はそれとして興味ある論題であろうが、ここでの主題ではない<sup>(15)</sup>。次に、キケロを代表的な古典ラテン語作家と認める限りでは、人文主義者は、程度の差はあれすべて「キケロ主義者」であった。人文主義とは、ほとんど定義によって、キケロ主義である。ここでは、キケロを排他的な模倣の対象として主張する、いわば強度のキケロ主義を指す。このように限定を付した上でも、人文主義におけるキケロの傑出した地位を考えれば、十五・十六世紀のキケロ主義は包括的・網羅的に論じるにはあまりに大きな現象であろう。本論が扱うのは、排他的なキケロ主義者とその反対者との間で戦わされた、キケロの模倣をめぐる三つの論争、すなわち一四八〇年代、一五一〇年代、一五二〇―三〇年代のそれである<sup>(16)</sup>。それぞれの論争を詳細にたどるとともに、その背景をなしていた、規範としての古代とラテン語とに対する人文主義者の態度の変遷を浮き彫りにしたいと思う。

#### 一 ポリツィアーノ対コルテージ

#### 人文主義者ポリツィアーノ

十五世紀後半の人文主義は、世紀前半の特徴を継承しつつ、独特の方向に発展していった。第一に、ギリシア学が発達した。十四世紀末にマヌエル・クリュソロラスがビュザンティオンからイタリアに渡来し、ブルーニのようなラテン語への翻訳者の最初の世代を育ててから、一四三八年に開会した東西教会の合同を目指すフェッラーラ・フィレンツェ公会議、一四五三年のコンスタンティノポリス陥落の影響もあり、ベッサリオン、テオドロス・ガザ、ゲオルギウス・トラベンティウス、ヨハネス・アルギロプロスら一流の学者がイタリアに定住して教育・翻訳・著述を行なうとともに、ギリシア語写本の移入を促進した。その結果、ギリシア語とその文学・思想への理解が一層深化した。このことを示す好例は、マルシリオ・フィチーノによる最初のラテン語完訳プラトンの公刊（一四八四年）であろう。<sup>(17)</sup>第二に、人文主義者の専門化・技術化が進展した。いつの時代にも、学者は生き延びるためには他人と違ったことをやり、競争に打ち勝たなければならない。大学の教授職や庇護者の支持を獲得しようとして、人文主義者は自らの能力を誇示し、かつ競争相手の無能を暴露するべく、新しいテクストや方法を追究した。そこから生じたのは、文献学の先鋭化である。<sup>(18)</sup>第三に、全般的な学知の量の増大によって、ラテン語の文体に対する相対的な視点が導入された。確かにキケロは偉大な著述家だが、唯一のラテン語作家ではない。他の学者の知らない、あるいは十分に理解できない文献を消化して、折衷主義的な文体を作り上げることが、平凡な集団から自分の学識を際立たせる手段ともなる。他方で、文体の相対性を熟知するにもかかわらず、排他的なキケロ模倣に努力を傾注したキケロ主義者が現われた。この場合も、動機は前者に異ならないであろう。以上の三つの特色を兼ね備えていたのが、十五世紀後半最大の人文主義者、ポリツィアーノ<sup>(19)</sup>だった。

アンジェロ・ポリツィアーノ<sup>(19)</sup> (Angelo Ambrogini, detto il Poliziano, 一四五四—一九四) は、生地モンテプルチャーノノ〔ポリツィアーノ〕なる通称はこの地名に由来する) から、十代半ばにフィレンツェに出て、この都市の大学

(Studio) に学び、メデイチ家に才能を見いだされてその庇護下に入り、ほどなくロレンツォ・イル・マニフィコの子供たちの訓育を委ねられた。十五歳にしてすでに『イリアス』のラテン語韻文訳を始め、同じ頃にギリシア語の短詩にも手を染めている。フィレンツェ大学でアルギュロプロス、クリストフォロ・ランディーノらに学ぶかたわら、メデイチ家の蔵書でラテン語・ギリシア語の主要な作家を読みつくした。一四八〇年にフィレンツェ大学の「詩学・修辞学」(Parte poetica e oratoria) の教授に就任して名声を博し、歿する一四九四年まで講義にヨーロッパ中から学生を集めた。その間、フィチーノやジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラのような哲学的傾向の人文主義者とも交友を結び、メデイチ家やヴァティカンの図書館を利用してさまざまな作家の本文の校合を行ない(もつとも校訂版は一点も公刊していない)、エビクテトスの『提要』などをラテン語訳し、ギリシア学の領域ではとりわけヘレニズム期の文学の研究や『ギリシア詞華集』に倣った詩作といった先駆的な仕事を果たしている。ポリツィアーノの文献学上の独創的な研究は、生前に印刷に付された数少ない著書の一つ『雑録』(Miscellanea, 一四八九年公刊)にまとめられた(第一集百章。第二集の五十五章は手稿が一九六一年に発見され、一九七二年に出版された)。ポリツィアーノはまたラテン語・イタリア語による当代随一の詩人でもあり、後者による作品『騎馬試合のためのスタンツェ』(《ウエヌスの誕生》などポツティチェッリの一連の神話画に題材を提供したとされる)、『オルフェオ』がよく知られている。しかしここで論じるのは、詩人ではなく人文主義者＝文献学者としてのポリツィアーノである。

『雑録』<sup>(2)</sup>は、標題が示すとおり、多様な文献学の問題を論じた、百章からなる論文集である。ポリツィアーノに先行する世代の文献学者は、通例、原典の章句を順にたどって語釈を施す注釈という形態を採用した。このスタイルは古代末期の注釈者セルウィウスなどに遡る伝統に列なっていたし、大学で特定の文献について講義するという職務には好適であり、聴講する学生にとっても便利なものだった。ポリツィアーノはこの伝統から離れて、高度に専門化し

たさまざまな論題を個別に扱った。ここでは、ポリツィアーノの文献学の特徴を叙述するために、まず『雑録』の「序言」を一瞥し、次にいくつかの章を見ることにしたい。

ポリツィアーノは「序言」の冒頭で、この著作の不揃いで寄せ集めに似た構成を弁護して、アイリアノスやゲリウスのような、秩序よりもむしろ「多様さ」(varietas)によって魅力を備えていた古代の著述家を先例に引いている。主題の多様さは読者の倦怠感を追い払い、先へと読み進めるための刺激になるであろう (varietas ipsa fastidii expultrix, et lectionis irritatrix)。もし誰かに生硬で晦渋に思われる話題があるならば、その人間の才知と学識に不足があるのだ。野蠻で古めかしい事柄が見られるのは、野蠻で無知な人々の気に入って本の売行きをよくするためである。見慣れない語彙があると言う人は、自分の知識が増えたときに意見を変えるだろう。キケロを十頁読むばかりでそれ以外は何も知らない人間に耳障りな言い回しがあるとすれば、学殖の深い人々に支持を求めよう。学者は無知な者の非難することを特に褒めたたえるものだから。慣例が邪魔になる場合には、真理が味方をしてくれるだろう。権威(典拠)に反して受け入れられていることが、慣例に従うと称されるときがある。「真理を欠いた慣例は古い誤りにすぎない」(Consuetudo sine veritate, neustas erroris est)。こうして自らの学識の広さへの絶対的な自信に基づいて、『雑録』の革新性を喧伝した後、ポリツィアーノは文献学における正確さの必要性を主張する。文芸にかかわる欺瞞を暴くためなら、私はどんな非難も甘んじて受けよう。というのも、「われわれ皆がこうして〔他の学者からの〕嫉妬を恐れて、批判がすっかり骨抜きにされている間は、どうして高貴な文芸〔研究〕の純粹さがこれ以上持続する、あるいは存在することができるだろうか？」私は多くの重罪が犯されるのを日々目の当たりにしているのだ、「他人のものがこっそり盗まれ、誰かに都合の良いことが好き勝手に捏造され、当人の与り知らぬことが適当な〔作者〕に帰せられ、伝存しない作者が典拠に持ち出され、どこにも見当たらない写本が古い写本として引照され

……信義もなく、廉恥も判断力もなしに、あらゆるものが汚され、混ぜ合わされ、泥を塗られ、漆喰を被せられ、振じ曲げられ、引っ繰り返され、投げ落とされ、偽造されているのを<sup>(22)</sup>。これは同時代の人文主義者の不正確な仕事に<sup>(23)</sup>対する批判であるとともに、以下で見るように、ポリツィアーノ自身の確実な典拠に基づく方法の宣言ともなっている。

『雑録』に現われたポリツィアーノの方法を次に具体的に見るが、紙幅の都合上、簡単な叙述をその代表的な特色を示す四つの章に限定せざるをえない。それらは、最古の典拠への遡行、写本の派生関係の特定、碑文等を用いた研究、ギリシア学における熟練である<sup>(24)</sup>。まず第三十九章では、アウソニウスの謎めいた表現「カドモスの色黒の娘」(Cadmī nigellas filias)が、カドモスがフェニキアからギリシアに移入した文字を指すことを説明し、その典拠をヘロドトスに求める。『ギリシア詞華集』などの類例を挙げた後、ポリツィアーノは、『スタ』、プリニウス等、同じことを述べている他の作家は省略する、と言う。なぜなら、彼らは皆ヘロドトスで読んだことを各々繰り返しているにすぎないのだから。ゆえに、彼らの共通の典拠を示せば十分なのである。「古人の証言は列挙するのではなく比較考量すべきであるとわれわれは考える」(Nec enim tam numeranda, sicuti putamus, ueterum testimonia sunt, quam ponderanda)。第二十五章では、「キケロの『近親者宛書簡集』の「非常に古い写本」(uolumen antiquissimum) (現在 M = Medicus 49.9 と称される、九世紀)が、その写し (descriptum) であるもう一つの写本 (P = Medicus 49.7, 十四世紀) の原本であることをまず述べ、後者が書籍商の不注意のために折り丁の位置を間違えて製本されていることを説明する。現存する他の写本はすべて「あたかも泉や水源から流出したかのように」(ceu de fonte capiteque manarunt) この乱丁を含む写本から派生しているために、それらの混乱した紙葉の順序は、ポリツィアーノがその直後に指示している通りに訂正しなければならない、と言う。ここでは、典拠について論じてい

た章で提示されたのと同じ原理が写本間の関係に適用され、読みの確定には最古の写本に遡らねばならず、そこから派生した写本は無価値であるという考え方がはっきりと現われている。これは十九世紀文献学のいわゆる「派生写本の排除」(eliminatio codicum descriptorum)という原則の先駆をなしているとされる。<sup>(25)</sup> さて、第七十七章においては、有名な氏族名「ヴェルギリウス」を“Vergilius”と“Virgilius”とのどちらに綴るべきかという問題に触れ、前者を選ぶべきだとする根拠に、「いくつかのきわめて古い記録」(veterrima aliquot monumenta)を挙げている。曰く、ウォルシニイにある神殿の祭壇の「非常に古い書体による」(vetustissimis...characteribus) 碑銘。ストリウムにある同じく神殿の祭壇の碑銘。(ポリツィアーノは伝聞に満足せず自分の目でこれらを確認したと付け加えている。) フィレンツェ市所蔵の『ユスティニアヌス法典』の「原本」(archetypus)。ヴァティカン図書館所蔵の「驚くべき古さの」(mire vetus) ヴェルギリウス写本(いわゆる「ローマ本」(codex Romanus))。ランディーノ所蔵の古い書体によるドナトゥスのヴェルギリウス注釈。アウグスティヌスとコルメラの写本(いずれもメディチ家蔵)。セネカの『道徳書簡集』写本(写しを作った写字生の名を明記)。最後に、ローマからロレンツォ・デ・メディチに送られた碑文集の中の二つの碑銘。これらはすべて、“Vergilius”と綴っているという。注意すべきことは、記録の古さの強調と、典拠の所在の正確な指示である。第九十章は、テオドロス・ガザ訳の(偽)アリストテレス『問題集』(二〇・一、九五三a一七—一八)を組上に載せて、ガザの誤訳を訂正するとともにギリシア語原文の修正を行う。死の前のヘラクレスの狂気について述べている問題の章句をガザのラテン語訳から直訳すれば、次のようになる。[子供たちの精神の動揺も、そして時折死に先立って腫物ができることも、この同じことを説明している]。ポリツィアーノはまず、英雄たちの病について述べたこの箇所でなぜ子供が問題になるのか、と問うて、「わが子らに對する(ヘラクレスの)恐怖または精神異常」と訳すべきだとする。さらに、「時折」と訳された意味をなさないギ

リシア語原文を、「オイテ山上で」と推定により修正した。ポリツィアーノの推定の正しさは、当時入手不可能だった良い写本の読みで現在確認されている。<sup>(26)</sup>ポリツィアーノは、イタリアで生まれ教育を受けた人文主義者が、ギリシアにおいてもビュザンティオンの学者を凌駕しうることを証明してみせたのである。このように、文献学者ポリツィアーノは、「真理を欠く慣例」の誤りを暴露するのに驚くべき手腕を発揮した。人文学のあらゆる領域において、当時のイタリアには自らの学者としての力量に敵する人文主義者がいないことを十分に自覚していたことであろう。

### ポリツィアーノの模倣論

それでは、ポリツィアーノは人文主義の指導原理である模倣についてどういう見解を持っていたか。キケロ主義論争の発端となったコルテージとの往復書簡には次節で詳しく論及するとして、ここでは教育者としてのポリツィアーノの模倣論を見ることにしよう。フィレンツェ大学の詩学・修辞学の教授に就任直後、ポリツィアーノは一四八〇—八一年度の講義の対象にスタティウスの『詩集』とクインティリアヌスの『弁論家の教育』を選び、「開講演説」(praefatio)として「ファビウス・クインティリアヌスとスタティウスの『詩集』についての弁論」<sup>(27)</sup>を行なった。これらの作品の選択は、ローマ文学におけるポリツィアーノの好尚(「黄金時代」よりもむしろ「白銀時代」)を表わすと同時に、同じ講座を分け合っていた、旧師でもある同僚ランディーノへの対抗意識からなされた。一四五八年に就任したランディーノは、ウェルギリウスとキケロの講義で知られていたのである。<sup>(28)</sup>

「弁論」はまず、二人の作家を選択したことへの世人の批判を予想する。これほど多くのすぐれた書物がある中から、なぜ殊更にこれらの最良とは言えない作品を選んだのか。乏しい才能と貧しい学識しかないこの私が、こうして「由緒ある、踏みならされた道を外れて、新奇な、いわば未踏の道に足を入れる」(novas... quaeque intactas vias in-



grediamur, veteres tritasque relinquamur) のが賢明なことなのか。ローマの雄弁の高貴さが墮落した時代の書き手を講義することが学生の利益になるのか。ウエルギリウスとキケロを解義する方が正しかったのではないか。この批判に、ポリツィアーノは、ちょうど農夫が葡萄の若木に支えをしてその成長を助けるように、すぐに最高の作者を読むのではなく、若者がより容易に模倣できる「劣った、第二級とも言うべき作者」(inferioris quasique secundae notae auctores) をまず与えて、徐々に学力をつけさせてはいけないのだろうか、と返答する。しかしその後でスタティウスの詩才に最大の称讃を呈して、その『詩集』は「弁論家も詩人も等しく模倣すべきもの」(oratoribus aequae poeisque imitandas exprimentasque) であると結論しているから、この一節は、偽装された謙遜(「好意の獲得」(captatio benevolentiae) のための)の一部分として解釈すべきかもしれない。<sup>(29)</sup> 模倣論として重要なのは、むしろ次のクインティリアヌスを称讃するセクションである。

ポリツィアーノによれば、クインティリアヌスは、言うなれば揺り籠から完成に到るまで弁論家の教育を引き受けるから、キケロの修辞学書よりも内容が豊かなのである。アリストテレスに従う哲学者たちが直ちにプラトンをその下位に置くわけではないのと同様に、クインティリアヌスを講義する私にもキケロを貶める意図はないのだが。また、クインティリアヌスが長らく読まれなかったのも、運勢と時とのなした破損によるので、この作者の咎ではない。いまや野蛮人の手を逃れて祖国に帰ってきた彼(『弁論家の教育』の完本は一四一六年ポッジョ・ブラッチョリーニによってスイスで発見された)を迎え入れないならば、われわれは冷酷な罪を犯すことになる。さらに、紀元一世紀には雄弁が墮落したのではなく、言葉の使い方が変化したのである。「異なったものがすなわちより劣っているわけではない」(Neque autem statim deterius dixerimus quod diversum sit)。「後の時代の「作家たち」には、間違

いなくより多くの洗練とより頻繁な楽しみがあり、思考の内容に富み、文彩にあふれ、意味も鈍重ではなく、構成も

拙劣ならず、まったくのところ、彼らは皆健全であるばかりか、力強く、喜ばしく、鋭敏で、活気と色彩にみちている。こうして文体の歴史的な相対性を説いた後、ポリツィアーノは修辞学教育における模倣論の核心に踏み込む。「誰か一人〔の作家〕だけを専一に模倣しようとするほど大きな過ちはない」(maximum sit vitium unum tantum aliquem solumque imitari velle) のだから、われわれはさまざまな著述家を手本にし、役立つことはあらゆるところから引き出すべきなのだ、草原を飛び回る蜜蜂のように。キケロ自身が多様な流派の弁論家から学んだのであり、「人間の本性にはすべての点で完璧なものはない」(nihil in natura hominum sit ab omni parte beatum) 以上、すぐれた画家がするように、われわれは複数の模範を目の前に置き、それぞれの用途に適したものを選びとる必要がある。最後にポリツィアーノは、私の講義する内容だけで満足するのではなく、自分でも他の良い作者を熟読するように、と学生に勧奨している。<sup>(31)</sup> こうしてポリツィアーノは、文献学者としての博識に基づいて、比較的穩健な折衷主義的模倣を主張した。<sup>(32)</sup> これは、キケロ主義者の排他的模倣論に対するとき、より鋭いかたちで表現されることになる。

### ポリツィアーノ＝コルテージの往復書簡

アンジェロ・ポリツィアーノとパオロ・コルテージの往復書簡は、おそらく一四八〇年代後半から九〇年代初めに交わされた。<sup>(33)</sup> 発端は、コルテージが、自分と知友がキケロを模倣して書いた書簡文例集を編纂し、それを友人であるポリツィアーノに送って意見を求めたことにあった。ポリツィアーノの折衷主義的見解は学者としての名声を考えれば広く知られていたであろうから、キケロ主義的文例集を特にポリツィアーノに呈したコルテージには、あるいは幾分挑発的な意図があったのかもしれない。いずれにせよ、ポリツィアーノの短い返信は、人文主義者の手紙に特有の

典雅な（または回りくどい）前置きを一切省いて、次のように単刀直入に始まる<sup>(34)</sup>。書簡集を返送するが、率直に言うて、これを読んで貴重な時間を無駄にしたことを恥ずかしく思う。あなたはキケロの文体を模倣する（qui linearum Ciceronis effingat）ものだけをこの中に集めているが、私には、人間に似ている猿（simia）よりも、雄牛や獅子の顔の方がはるかに高貴に思える。ただ模倣のみによって文章を作る人々は、理解できないことを喋る鸚鵡や鶴<sup>カモ</sup>のようである。彼らの書くものは力と生気を欠いており、そこには本当のもの、堅固なもの、効果的なものが何一つない。この後にポリツィアーノは、ルネサンスの模倣論の中でおそらく最も有名な章句を書き記している。「あなたはキケロを模倣していない、と言う人がいる。それがどうしたというのか？ 私はキケロではないのだ。思うに、私は私自身の姿を描いているのである」<sup>(35)</sup>（Non exprimis, inquit aliquis, Ciceronem. Quid tum? non enim sum Cicero; me tamen, ut opinor, exprimo）。さらに、文体がまるでパンでもあるかのように、細切れに他人から恵んでもらう人がいるが、こういう人々は、手本にする書物が近くにないと、単語を三つ繋ぎあわせることもできない。彼らの文章（oratio）は、常に震え、足元がおぼつかず、病弱である。しかもこの連中は厚かましくも、博学な人間つまり「深遠な学識、多岐にわたる読書、長年の経験が、いわばその文体を発酵させてきた」（de doctis... quorum stylum recondita eruditio, multiplex lectio, longissimus usus diu quasi fermentavit）人々にこいて、裁判官めいたことを言ったりもする<sup>(36)</sup>。

ポリツィアーノは次にコルテージに対する忠告に移り、いつもキケロの姿から目を離さないという「迷信」（superstitio）を捨てるように、と言う。「キケロだけでなく他の良い作家をも、深く長く読み、理解しつつし、憶え込み、自分の中に消化し、さまざまな事柄に関する知識で心を充たした上で、自分自身でも何か作品を書こうとするときには……ただキケロだけを模倣しようとする、あのあまりに気難しく不安げな懸念を捨てて、いよいよ自分の全能力を

試してみたまえ<sup>(37)</sup>」。このように、ポリツィアーノは、たとえキケロであろうと唯一の作者を無謬の模範にし、模倣を  
 れ自体を目的にすることに反対した。そして、複数の作者をわがものにし、豊富な知識を身につけて、自らの能力を  
 信頼して執筆することを主張した。古代の典拠を博搜して多様な学識を獲得することを目指した文献学者ポリツィア  
 ーノと、さまざまな作者の読書から折衷主義的な文体を創出することを唱道した修辞学者ポリツィアーノとは、こう  
 して首尾一貫していたのである。

次にコルテージの返答を見よう。ポリツィアーノとは対照的に、コルテージはまず人文主義者の作法に従って、多  
 忙なあなたはわれわれの書簡集を忘れたかと思っていたが、味見をすどころか貪るように読んだ後で返送して下さ  
 ったのは、まったく意想外のことである、と相手を立てる<sup>(39)</sup>。それからキケロ模倣の擁護を始める。確かに私はしばし  
 ば、「雄弁の研究がかくも長い間蔑ろにされ、法廷（弁論）が打ち捨てられ、当代の人間にいわば生まれながらの  
 が欠けているのを見て、誰かある（作家）を模倣の対象にする人々でなければ、この時代に華やかで多様な仕方でも  
 のを言うことは不可能である」と公言してきた<sup>(40)</sup>。それは、言葉を知らずに異国を旅する人間が案内人が必要とし、赤  
 ん坊が乳母に手を引かれなければ歩けないのと同じことである。そして、数ある雄弁家の中で、才能あるすべての人  
 間が研究すべき対象として、キケロただ一人を選んだ。あらゆる時代の意見の一致によって、キケロが第一人者とさ  
 れたからであり、私は子供の頃から最高の作家を選ぶように教えられたからである。ここまでは、模倣の対象を単一  
 とすることを除けば、コルテージの主張は人文主義の標準的な雄弁復活論と言ってよいだろう。

模倣は、「猿が人間に似るのではなく、子供が父親に似るように」(similiem... non ut simiam hominis, sed ut  
 filium parentis) すべきである。子供は父親の顔や動作や声を再現するが、しかし何かしら独自のものを持っている  
 のだから<sup>(41)</sup>。それゆえ、模倣者同士を比較すれば互いに異なって見えるのである。キケロの表現の豊かさを模倣するこ

とは実際にはきわめて困難だから、あなたは私にキケロの模倣をやめさせようとするよりも、むしろ模倣に成功しない私の無能力を責めるべきだろう。とはいえ、私は、他の人々の子供よりも、キケロの猿になる方を選ぶのだが。さらに、模倣が必要なことは、あらゆる技艺が自然の模倣であることから明らかである。だが、同じ類においても相違が生じることも、自然の必然である。キケロを模倣した人々、たとえばリウィウス、クインティリアヌス、ラクタンティウス、コルメラを比較すれば、これほど互いに隔った著述家はいない。これは、模倣には慎重な判断力を要することだけでなく、かくも多様な才能が流出した水源であるキケロがいかに驚嘆すべき人間だったかを証拠立てている。

書簡の最後の部分で、コルテージは、ポリツィアーノの折衷主義（またおそらくは彼の文体そのもの）に特に向けられた批判を展開する。才能が形成され育まれるためには、どうしても特定の作者につかなければならない。誰も模倣することなく称讃を獲得しようとする人間は、文章の力を身につけることは決してない。「自らの才知の援助と能力とを恃むと称する人々は、必ず他人の著作から表現を掘り出してきて自分の書き物に詰め込むことになる。そこから生まれるのはまったく欠陥のある文体であり、彼らはあるときは汚らしくだしらない姿で、またあるときは壯麗で華やかな姿で現われるのだ」。さまざまな種類の食物を体内に入れてもよく消化できないし、さまざまな種類の言葉は互いに衝突する。「この墮落した文章の寄せ集めの荒々しい（響き）は、崩れ落ちる岩石の騒音、雑音、往来を行き交う馬車のように、耳に不快である」。曖昧な意味の言葉、位置を入れ替えられた単語、唐突な思考の展開、見苦しい構成等々が、どういふ喜びを読者に与えるだろうか？「こうしたことは、個別の〔作者〕から表現や言葉を探り出して、誰も模倣しないこれらの人々すべてに、必然的に起こることなのである」<sup>(42)</sup>（*Quod necesse est his omnibus accidere, qui ex singulis sensus et verba eruunt et neminem imitantur*）。つまり、複数の作者を模範とす

る折衷主義は、正しい意味での模倣とは言えない。結論として、コルテージは、ギリシアでもローマでも、弁論家のみならず哲学者も、雄弁で名声を博した人々は皆模倣を行なったこと、たとえ失敗したとしても、キケロを模倣の対象に選ぶことは、健全な判断力行使した点で称讃に値することを主張している。

以上に見たように、ポリツィアーノとコルテージの模倣論争において、折衷主義とキケロ主義との主張が初めて明確なあたりで提示された。この論争の重要性は、後に見る二つの論争で明瞭に言及されていることから明らかだが、三つの点に注意すべきであろう。第一に、両者に類似した主張はそれまでもなされてきたが、ここに到って特にはつきりした輪郭をとったこと。これは、人文主義がますます鋭敏な知的・美的識別能力を加えつつあった一四八〇—九〇年代という文脈で考える必要がある。ギリシア・ローマの古代研究の全領域で不可能事のないポリツィアーノから見れば、キケロ主義はあまりに限定された活動に思われたらう。一方、文体のニュアンスに敏感なコルテージには、それまでの人文主義者の不純なラテン語のかわりに、最高のラテン語作家であるキケロを忠実に再現する純粹な古典主義を要求することは、ほぼ論理的帰結だったに違いない。第二に、ポリツィアーノの流儀による折衷主義は、長年の読書と傑出した才能を要するために、一握りの選良にのみ許されていた。それに対して、キケロ模倣はある程度方法化することができ、この均質な文体は、従順に学習しさえすれば誰にでも習得することが可能だった。<sup>(43)</sup>第三に、この二つの流派は、イタリア半島の諸都市に等しく分布していたわけではない。折衷主義はポリツィアーノの本拠地フイレンツェ、キケロ主義はローマを中心とした。次節で、このローマとキケロ主義とのつながりを手短かに考えたい。

#### パオロ・コルテージとローマのキケロ主義

パオロ・コルテージ<sup>(44)</sup> (Paolo Cortesi, 一四六五—一五一〇) は、サン・ジミニャーノ出身の一族の子としてローマ

に生まれ、ローマ、ピサなどで教育を受けた後、父と兄に倣って教皇庁 (Curia Romana) に入り、一四八一年に書記官 (scriptor)、九八年には秘書官 (secretarius) の地位に就いた。フィレンツェの人文主義者とも交友があり、これがポリツィアーノとの論争の背景をなしている。著書には、イタリア人文主義者のラテン語の文体を論じた対話篇『学識ある人々について』(De hominibus doctis, 一四九〇年前後執筆)、『神学命題論』(Liber sententiarum, 一五〇四年公刊)、『枢機卿職について』(De cardinalatu, 一五一〇年公刊) がある。晩年の最後の著作では、コルテージは純粋なキケロ主義から離れて、擬古的な語彙・構文を用いる「アプレイウス主義」に向かったが、『神学命題論』は、伝統的な神学の語彙を使わずに、キケロのラテン語でキリスト教の神学体系を叙述しようとしている。<sup>(45)</sup> 一見奇矯に思えるこの試みは、ローマとその教皇庁という環境において考えなければならない。

十五世紀に入って安定を取り戻したローマ教皇庁は、当時のイタリアで最も整備された大きな官僚組織であり、勅書のような文書作成を行なうポストを、人文主義者に提供した。<sup>(46)</sup> フィレンツェ人の中でも、ポッジョ・ブラッチョリニ、レオナルド・ブルーニが祖国の書記官長に就任する前に教皇秘書官を務めているし、その他にも、ジョヴァンニ・アウリスバ、ロレンツォ・ヴァッラ、ニッコロ・ペロッティ、ジャンノッツォ・マネッティといった多数の第一線の人文主義者が教皇庁に勤務したのである。おそらく、すべての官僚組織と同じく、一定した地位と収入とをもたらず点が人文主義者にとって魅力的だったのであろう。また、人文主義に好意的な人物が教皇に選出されれば、ローマにはその他にも人文主義者の活躍の機会が生まれた。ニコラウス五世(在位一四四七―一四五五)の委嘱によってギリシア語文献のラテン語訳が大量に行なわれたことはよく知られている。<sup>(47)</sup>

教皇庁に働く人文主義者たちが共通の文体として選んだのが、キケロ主義的ラテン語だった。官僚として、均質で習得の容易な文体を必要としたことが理由の一つである。しかし、より重要な原因は、国家としての古代ローマと、

西方世界に君臨する「普遍的」なローマ教会との間に意識された連続性だっただろう。ヴァッラも言ったように、人文主義のイデオロギーにおいては、「ローマの言葉」と「ローマの支配」とは同一物である。ならば、できる限り本来の純粹な「ローマの言葉」に近い言語、すなわちキケロを模倣したラテン語を用いることは、ローマ教会の権威と正統性を高める手段となるだろう。<sup>(48)</sup> 教皇庁の外部でも、人文主義者は非公式の「アカデミー」を組織したが、その主要な関心の一つはラテン語の文体だった。こうして、キケロ主義はローマの人文主義の特色となり、一五二七年のカルル五世の軍隊によるローマ掠奪まで続いてゆくのである。

## 二 ジャンフランチェスコ・ピコ対ベンボ

### G = F・ピコの哲学

キケロ主義論争の第二幕の主人公の一人ジャンフランチェスコ・ピコ・デッラ・ミランドラ<sup>(49)</sup> (Gianfrancesco Pico della Mirandola, 一四六九—一五三三) は、ここまで登場した人文主義者たちとは幾分異なる知的形成を経た。ミランドラ公国の領主の長男として生まれたジャンフランチェスコ・ピコは、フィチーノなどフィレンツェの人文主義者との交友のうちに育ったが、彼に決定的な影響を与えたのは、二人の人物、すなわち父方の叔父ジョヴァンニ・ピコとドミニコ会の修道士ジローラモ・サヴォナローラだった。サヴォナローラは、預言者的説教によって一四九〇年代にフィレンツェの知的環境に勢力をふるい、九二年のロレンツォ・デ・メディチの死去から、九四年のシャルル八世率いるフランス軍による侵略を経て、九八年の火刑に到るまで、この都市の実権を握った。その諸説混淆主義的な哲学で知られるジョヴァンニも、やはりサヴォナローラの影響下に入った後、宗教的思想へと傾斜していった。ジ



ジャンフランチェスコは、両者の伝記を著すとともに、断罪後のサヴォナローラのために擁護文を公表し、ジョヴァンニの最初の『全集』を編纂している。九九年に父が死ぬと、二人の弟と母に対する領地の相続権争いに巻き込まれ、一五〇二年には武力で追放されて、ドイツを含む各地で亡命生活を送ることを余儀なくされた。一五一一年に教皇ユリウス二世の介入を得て一旦領地の支配を回復するが、同年再び追放され、ローマに赴いた。この時期に、ローマに暮らしていたピエトロ・ベンボとの間で論争が行なわれた。一四年に調停が成立してミランドラに帰還し、その後も敵方と小競り合いを繰り返しながら著述を続けるが、一五三三年に甥に暗殺されて世を去った。

ジャンフランチェスコ・ピコは、人文主義者よりもむしろ哲学者と呼ぶ方がふさわしい人物だが、その著作は、おそらくサヴォナローラと晩年のジョヴァンニ・ピコとの接触から生まれた、反哲学的・唯信論的傾向を特徴としていた。<sup>(30)</sup>一四九六年に執筆された『神的哲学と人間的哲学の研究について』(De studio divinae et humanae philosophiae)がすでに、聖書の読書と人間的学問とを対照し、後者の基盤である感覚の不確かさを強調して、キリスト教徒に必要なのは聖典のみであり、学問は有益ではあるが必要なものではないことを主張している。ピコの代表作『異教徒の学知の空しさとキリスト教的学問の真理との検討』(Examen vanitatis doctrinae gentium et veritatis Christianae disciplinae, 一五二〇年公刊)は、当時の優勢な哲学流派であるアリストテレス主義の論駁に当てられており、古代の懐疑主義の伝達者セクストス・エンペイリコスを援用しつつ(ピコはセクストスを本格的に利用した近代で最初の思想家である)、諸学派の学説の不一致が示すように、哲学の理性的探究は、知識の真偽の確実な判断基準を持たないために、空虚な営為であることを説いている。異教的学知の価値は全面的に否定され、キリスト教の信仰が唯一の救いであるとされる。とはいえ、近代の懐疑主義者全般と同様に、ピコも無知な狂信者だったのではなく、きわめて広い領域にわたる学識を備えていた。<sup>(31)</sup>ピコが否定の対象を知悉した上で批判したことは、後に見るベンボとの論

争にも現われるとおりである。<sup>(52)</sup>

### ピエトロ・ベンボ

ピエトロ・ベンボ<sup>(53)</sup> (Pietro Bembo, 一四七〇—一五四七) は、ピコとは対照的に、典型的なローマの人文主義者の経歴をたどった。ベンボはヴェネツィアの貴族の長男に生まれ、イタリア諸都市へのヴェネツィア大使などの要職を歴任した父に伴って幼い頃から各地を旅した。一四八七—八八年、そうした機会の一つに、最初のローマ滞在をしている。九〇年頃ラテン語の詩作を始め、九一年写本探索にヴェネツィアを訪れてベンボ家の客となったポリツィアーノとの出会いが、ピエトロに文芸の道を進む決心をさせたという。教育としては、まず九二—九四年にメッシーナでコンスタンティノス・ラスカリスについてギリシア語を学び、続いてパドヴァで哲学を修めた。九七年からフェッラーラの宮廷に滞在し、イタリア語の詩を作り始めたが、ここでのちにローマで同僚となるヤーコポ・サドレートと交友を結んだ。父親と同じく公職に就くことを期待されたベンボは、一四九九—一五〇一年と一五〇四年に、何度かヴェネツィア共和国の官職選挙に立候補するが、すべて落選する。一五〇一—〇二年には、ヴェネツィアの人文主義者<sup>(54)</sup>出版者アルド・マヌツィオのために、ペトラルカとダンテのイタリア語の作品を、古典と同様の文献学的厳密さで校訂・出版した。一五〇五年大使として派遣された父とともにローマに赴き、枢機卿や高位聖職者に知己を得た。同年再び大使職に数度立候補するが、やはり落選する。ベンボはこの試みを最後にヴェネツィアを去り、ローマ教皇庁に人文主義者としての能力を生かせる地位を求める決意を固めた。一五二二年春にローマに居を定めたベンボは、一三年三月に教皇レオ十世が選出されると、サドレートとともに、書記局で最も位階の高い私的秘書官 (domesticus) に任命された。秘書官の職務は、煩瑣な手続きを必要とする大勅書の作成 (これは書記官の任務である) と異

なり、教皇の個人的な書簡である小勅書を執筆することになり、二人の著名なキケロ主義者、ベンボとサドレートが彼らの頂点に立つ私的秘書官の地位に就いた事実は、教皇庁の中でキケロ主義的ラテン語が公式の文体として認められたことを意味していたのである。<sup>(54)</sup>ピコとの書簡が交わされたのは、この象徴的事件と前後してのことだった。ベンボは、イタリア語の文体についても、古典主義的規範を定める著作『俗語論』(*Prose della volgar lingua*, 一五二五年公刊)を著して成功を収めた。その後のベンボは、教皇庁内のみより高い地位を望みながら長らく果たさず、一五三〇年に祖国ヴェネツィアの修史官およびサン・マルコ図書館長に任命された後、ようやく三十九年にパウルス三世によって(人文主義者としては異例の出世だが)枢機卿に任じられた。一五四七年の死を迎えたのはローマにおいてだった。

### 往復書簡の哲学的含意

ジャンフランチェスコ・ピコとベンボの往復書簡<sup>(55)</sup>は、一五二二年九月一九日付のピコの書簡、一五二三年一月一日付のベンボの返信、日付のないピコの第二信、の三通からなる。この時期にローマに居合わせた二人は、人文主義者の集まり、おそらくはアンジェロ・コロッチの主催する「アカデミー」(「コロッチの庭」(*Horti Colotiani*))と称した)で議論を交わし、その内容を後で書簡に書きとめたのである。<sup>(56)</sup>往復書簡を論じるにあたっては、最初にピコの二つの書簡をまとめて、次にベンボの返信を見ることにしたい。ピコは第二信で、ベンボからの返答に応えて見解を変えているのではなく、第一信の所論をあるいは繰り返し、あるいは敷衍しているからである。

ピコは冒頭で、唯一の作家ではなくあらゆる良い作家を模倣すべきであり、それもすべての事柄においてではない、という折衷主義的な見解を提示した後、哲学的思弁に基づく独特の模倣論を展開する。ピコによれば、人間は「誕生

の瞬間から、固有で生来の精神の促しと傾向とを獲得している」(proprium...et congenitum instinctum et pro-pensionem animi nactus est ab ipso ortu) のであり、「われわれの精神には何かある根の如き〈アイデア〉が内在してゐる」(nostro in animo Idea quaedam et languam radix insit aliqua)。この力によつて、われわれは良きものを得るように導かれるので、それを破壊するのではなく養い育てるよう努めなければならない。自然は「他の徳の〈アイデア〉と同様に、正しく話す術の〈アイデア〉をも与え、精神内にその美しさの似姿(simulachrum)を備えつける。われわれはこの似姿にしばしば目をやりながら、他人のものと自分のものとを判断するのである」。しかし、この雄弁の〈アイデア〉を完全にわがものにした人間はおらず、自然は多様な事物にその美を分け与えているのだから、ヘレネの一つの身体を完璧に描くために五人の乙女をモデルにした画家ゼウクシスのように、複数の模範を選ぶ必要がある。「それゆえ、われわれは精神の内に持っている弁論の完全な能力を模倣しなければならぬ」(imitari itaque eam debemus, quam animo scilicet gerimus dicendi perfectam facultatem)。もっとも、ピロは、この〈アイデア〉が「まったく生来のもので、最初から完成しているのか、それとも、時間の経過とともに、数多くの作家を読むことよつて形成されるのか」は定かではないと書いている。<sup>(57)</sup>新プラトン主義とアリストテレス主義をつきまぜた感のあるこの〈アイデア〉の概念内容、またその超越的な規範と個人に固有の傾向との関係については、ピロ自身もやや曖昧なところがあったと見えて、第二信でさらに説明を加えている。〈アイデア〉そのものは、プラトンが言うとおり、変化を被らず、感覚で捉えることができず、理性で理解することしかできない。〈アイデア〉からは「精神内の似姿」(animales imagines)が墮落したかたちで流出し、これらの似姿を言葉がいわば「鏡」(specula)のよう

に感覚的に映し出す。われわれがたとえばキケロの弁論に惹かれてそれを模倣しようとするのは、そこに反映した雄弁の〈アイデア〉の似姿を知覚するからなのである。この似姿は各個人の多様な氣質<sup>(58)</sup>(temperamenta)から修正を受

け、さまざまな文体を生み出す。結論として、ピコは次のように述べる。「ゆえに、いわば「模写すべき」雄弁の一つの身体を、自らの精神から引き出し、他の〔著述家の〕雄弁の数多くの徳からこしらえ上げる人々こそが、最も巧みに模倣をする人々と言われるのである」<sup>(59)</sup>。ピコの議論はあまり明瞭とは言えないが、超越性と個性とを組み合わせ、特定の作者を絶対的な模範とするキケロ主義を論駁しようとする点で独創的なことは確かであろう。

最初の書簡の残りの部分では、ピコは、独自の主張を述べるのではなく、多種多様な論法でキケロ主義の前提を破壊しようと努めているが、これらもやはり冒頭部に劣らず独創的なものである。まず、文献学的議論を用いて、写本伝承の過程で、あるいは写字生の不注意で、キケロのものではない語彙がその著作に紛れ込んだかもしれないことを指摘する<sup>(60)</sup>。また、修辞学の五つの部分を個別に検討して、想案 (*inventio*) において他人を模倣することは盗作にほかならず、配列 (*dispositio*) と措辞 (*elocutio*) とは想案に従うのだから、結局のところ、弁論全体を自分のものにしなければならない、と言う。記憶 (*memoria*) と発声 (*pronunciatio*) は記録に残っていないために模倣が不可能である<sup>(61)</sup>。さらに、われわれの時代に、話すべき題材を見いだす才能が不足しているわけではない。「生みの親たる自然は、あたかも年老いた女のように、活力を使い果たしてはいない」(*Neque enim quasi vetula mulier, suis est viribus parens effoeta natura*)。才能は減少するのではなく増大するものである。現代人は、学識ある古代人も知らなかった多くのことを知っているではないか。当代の人間は、過度の古代崇拜のために判断力を失っており、キケロの名を冠した偽作の書簡が称讃される一方で、キケロの真作を現代の著述家の作品として示せば徹底的に批判される有様である<sup>(62)</sup>。ピコは最後に、模倣の理論的な困難を指摘する。他人の弁論をそのまま借用したとして、その中の一つの韻律、一つの文を変えただけで、弁論の全構造が崩れてしまう。また、キケロの著作にも多様なジャンルがあり、その文体は一樣ではない。それらを書いたときの年齢、精神・身体の状態によっても、弁論は変化する。それ

なのに、一人の作者を模倣するということが可能なのか。加えて、キケロの用いた単語を使っても、その位置を変えれば、それはキケロの文章とは別物になる。<sup>(63)</sup>さまざまな文体は、自然の作った人間の気質の多様性から生まれている。結論の部分で、ピコは、精神内の〈アイデア〉に従って、あらゆる模範から自らの文体を作るべきことを再び述べるとともに、ただ一人の作者を、まるで神であるかのように、すべての点で模倣することの愚を戒めている。<sup>(64)</sup>

ベンボの返信は二つの部分に分けて考えることができる。まず前半部ではピコに反論して、単一の模範を選ぶことを主張する。自然はすべての人間に模倣の欲求を与えているのであり、しかも、あらゆる良い作家をではなく、一人の最良の作家をこそ模範にするべきである。なぜなら、他の作者にある個々の美質がすべて、この最高の作者にはより輝かしかたちで見いだされるのだから。ベンボはピコの〈アイデア〉論を転用して、次のように言う。「われわれは、最も美しく完成された著述の似姿 (simulacrum) を、それを模倣することに熱意と努力を注ぐための対象として、選びとらねばならない」。<sup>(65)</sup>しかしその直後に、哲学者ではないベンボとしては当然ながら、執筆の規範となる〈アイデア〉の存在に疑義を呈する。私自身に關する限りでは、こう確言することができる、「長い年月をかけて古人の書物を読み、多大な努力および長い経験と訓練とによって、精神と思考の内にそれらを自ら形成するまでは、「精神内に」文章の形相や弁論の似姿などを見かけたことはなかった」と。それに、もしそうした〈アイデア〉があるとしても、それらは各個人で異なる複数の存在だから（これはピコの議論の弱点を突いたもののように見える）、そこから生まれる努力の目標として、やはり最高の作者だけを模倣すべきだと、なぜ言わないのか。<sup>(66)</sup>しかし、この問題についてのベンボの結論は、まったく実例的なものである。「模倣はすべて実例にかかわるものだから、「似姿ではなく」実例から求めなければならぬ。仮に実例がないとしたら、そもそもいかにして模倣というものが成り立つだろうか？」<sup>(67)</sup>

ベンボは次に複数の作者を模範とすることの論駁へと進む。第一に、「模倣とは、ある著述の形態全体を包含し、その部分の各々に追従することを目指し、文章の構造および形状の総体にかかわるものである」。サルスティウスの簡潔さやカエサル<sup>1</sup>の抑制を模倣しようとしながら、そこに異質な要素を混ぜ合わせたならば、その人間は模倣しているとは言えない。第二に、複数の作者を模倣しようとする人間は、同時に多数の対象に目をやるならば精神の平静を失い、次々に新奇で多様な文体に気を惹かれたとすれば注意力や熱意を弱めてしまう。第三に、ある作者の文体は、その美質と欠点とを含めて、あらゆる部分の総合から成り立っているので、複数の文体から個別の要素をとることはできない。それはちょうど、ある人の顔立ち (similes) は善良さを、また別の人の顔立ちは勇敢さや荘厳さを表わしているが、それらの性質は、個々の部分ではなく顔の全体によって構成されているのと同じである。文体の性質を模倣しようとするなら、その全体を模倣しなければならず、その作者の気質を自分のものにせねばならない (これもやはりピコの論法の転用である)。多数の作者を模倣することが仮に可能だったとしても、そこから生まれる文体は首尾一貫しない矛盾したものになり、まるで古代の詩人の描写したプロテウスの姿のように現われるだろう。<sup>(68)</sup>

ベンボの書簡の後半部は、散文においてはキケロ、叙事詩においてはウエルギリウスを唯一の模倣の対象とすることの積極的な主張に当てられている。ベンボはまず、この見解に到達した経緯を順を追って物語る。<sup>(69)</sup> 自分は最初、哲学説と同様に文体についても、規則に縛られるべきではなく、その都度良いと思えるものに従えばよいと考えた。しかし、どの文体を試しても、すべて古代人がすでに手がけていることに気づき、意見を改めて、いわば案内人・競争相手として模範を選ぶことにした。ここで迷ったのは、すぐに最高の作者につくべきか、それとも凡庸な著述家にまず向かうべきかということだった。<sup>(70)</sup> 私の弱さのゆえか、最初に凡庸な模倣を選び、それから最良の作者に転じたが、このとき悟ったのは、前者は後者を学ぶための補助にはならず、精神に悪い習慣を残すためにかえって妨げになると

いうことである。この過ちを埋め合わせるためにも、私は全力を最良最高の作者を模倣することに捧げたのである。これらの作者とはキケロとウェルギリウスであり、この二人により完成したかたちで見いだされない文体の美点は存在しないのだから、万人が両者の模倣に努力すべきなのである。この後でベンボは、キケロの人格に向けられる批判に対して、興味深い反論をする。キケロは自分の業績や執政官職について時折自慢をしたが、これは文章の過ちではなく精神の欠点や判断力の欠如によって起こった咎にすぎない。「彼の生涯を私はすべての点では称讃しないかもしれないが、弁論と文章の流儀を非難することは決してないだろう。最良とは言えない生涯においても、「文章は」最良でありうるのだ<sup>(71)</sup>」。さらにベンボは、キケロが先行するラテン語作家すべてに抜きんでたように、誰かある著述家がいっつかキケロを凌駕する可能性を示唆する。ただし、これがなされるためには、キケロを最大限に模倣する必要がある。ベンボはこの過程を三段階に分けて、まず最良の模範を忠実に模倣し (imitari)、それに肩を並べたなら (sequi)、最後にこれを追い越す (anteire) ように努めるべきだ、という。競争 (aemulatio) は常に模倣と組み合わせなければならない。この現代人の古代人との競争への示唆は、おそらくキケロ主義者としてのベンボの最も特色ある見解であろう<sup>(72)</sup>。また、エレゲイアや抒情詩などのジャンルでは模倣の対象に適しているとは言えないウェルギリウスとは違って、キケロの文体は万能であり、散文で扱われるあらゆる主題に適応できる。常に同一でありながら、この文体は無数の題材に応じてさまざまに変化するのである<sup>(73)</sup>。ベンボは最後に、ピコの想案の借用≡盗作説に反対して、文体だけでなく多種多様な題材を模倣することに何ら問題はないと主張する。ただし、模倣した事柄を措辞の上でより巧みに表現しなければならぬ。「われわれの借用したものが、その典拠である〔作者〕においてよりも、われわれの作品において一層光輝ある傑出した姿で現われ、想案に劣らず文飾にも称讃の対象があったと思われるように」するべきであり、「農事詩」でヘシオドスから題材を借りたウェルギリウスも、「想案よりも〔措辞における〕



成功の方にはるかに大きな栄光を見いだしていたように思われる<sup>(74)</sup>。

ジャンフランチェスコ・ピコとピエトロ・ベンボの論争は、ポリツィアーノ・ニコルテーシ論争を継承しつつ、そこに含まれていた論点をより詳細に論じ、模倣という行為の考察に哲学的な拡がりを与えた。ピコは雄弁の「ヘイデア」を措定したが、ベンボの範例であるキケロの文体も、それに劣らず理想化された、非歴史的な範型に変化しつつあるように見える。教皇の支配するローマという環境では、この古典主義的な理想は歓迎され、強大な勢力をふるった。次に、この現象が北ヨーロッパの代表的人文主義者エラスムスに呼び起こした破壊的な反応を見ることにしよう。

## 二 エラスムスとその後

### 『キケロ主義者』の背景

ネーデルラントに生まれてヨーロッパの諸都市を遍歴し、最終的に全ヨーロッパ的な成功を勝ち得たデシデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus, 一四六六/六九—一五三六) の経歴と多面的な執筆活動については、本論で詳述することは不可能であり、また不必要でもあろう。ここではただ、キケロ主義論争への彼の重要な寄与である『キケロ主義者』を論じるための前置きとして、エラスムスの言語論、ローマのキケロ主義に対する反応、『キケロ主義者』成立の契機となった人物クリストフ・ド・ロングイユについて、簡単に触れるにとどめたい。

十六世紀に本格的にイタリアから移入された北ヨーロッパの人文主義は、イタリアの人文主義とは異なった独自の特徴を備えるに到った。修辞学に限って言うならば、その教育的側面が重視され、方法化・体系化された教科書が書かれた。また、古代の雄弁を再現することよりも、同時代の状況に適した仕方を実際的に言語を使うことに力点が置

かれた。<sup>(76)</sup> エラスムスはラテン語教育のためのさまざまな教科書を執筆し、それらは十六世紀のベスト・セラーとなったが、その一つに『豊かな表現について』(一五二二年初版)がある。<sup>(76)</sup> 二部に分かれたこの教科書は、所与の文の表現を言葉/措辞 (verba) と主題/想案 (res) とに関して無限に変化させる方法を教示しており、たとえば第一部では、実例として「あなたの手紙は私を大いに喜ばせた」(Tuae litterae me magnopere delectarunt) という文が、措辞の変化によって、一四七通りに変奏されている。<sup>(77)</sup> 用いられるラテン語表現は古典作家の折衷的模倣から採るべきことが明言されているので、その限りで人文主義の枠組を逸脱するものではないが、ラテン語に対するこうした自由な考え方が、古代の規範を墨守するキケロ主義とは指向をまったく異にしていることは明らかであろう。

エラスムスは一五〇九年にローマを訪れ、同地の人文主義者と親しく交友したが、その過度のキケロ主義、そしてユリウス二世治下のローマの教会人の、エラスムスの目には異教的と映ったキリスト教観に違和感を抱いて北ヨーロッパに帰還した。ローマの人文主義者とエラスムスとの溝はその後も拡大し、ルター派に対するエラスムスの態度とといった微妙な要素も絡んで、エラスムスと彼のラテン語を「野蛮」と攻撃する人々も一部に現われた。エラスムスは、『キケロ主義者』執筆前後の書簡、たとえばアルカラの人文主義者フランシスコ・デ・ベルガラに宛てた一五二七年一〇月の書簡で、ローマのキケロ主義者を明確に批判して、彼らのキケロ主義とは異教崇拜を隠すための煙幕にすぎないこと、彼らは実際にはキケロの模倣に成功していないこと、暇に任せて一通の書簡を書くのに三カ月を費すキケロ主義者と違い、自分は時として一日に一冊の本を書かねばならないことを述べている。<sup>(78)</sup> このように、エラスムスの『キケロ主義者』執筆の動機には、修辭学的・宗教的な理由の他に、個人的攻撃に対して自己弁護をする必要があったことは否定できないようである。

『キケロ主義者』執筆のもう一つの契機は、ネーデルラントの人文主義者クリストフ・ド・ロングイユ<sup>(79)</sup> (Christo-

Die de Longueuil, 一四八八一—一五二二)の存在だった。ノルマンディ出身の一門にメヘレンで生まれたロングイユは、パリで教育を受けて、初めイタリア人文主義に批判的だったが、ピエトロ・ベンボと出会ってキケロ主義に「改宗」した。ローマの人々に「キケロ主義者」として認められたロングイユは、ベンボとサドレートの後楯で「ローマ市民」に推挙されるが、パリ時代に行なったイタリアを貶める演説を発見されてローマから逃亡し、パドヴァで夭折した。エラスムスから見れば、ロングイユはローマのキケロ主義の犠牲者になった同郷人のように思われたかもしれない。ローマからの逃亡直後の一五一九年一〇月にルーヴァンでロングイユに面会したエラスムスは、彼のやや偏執的な性格に強い印象を受けた。『キケロ主義者』に登場するノソポヌスは、同時代人には、ロングイユをモデルにしている<sup>(80)</sup>と受けとられたらしい<sup>(81)</sup>。フランスの人文主義者エティエンヌ・ドレ<sup>(82)</sup>のように、『キケロ主義者』がロングイユを誹謗する目的のために書かれたと解釈するのは外れとしても、ロングイユがノソポヌスの人物像の発想のいわば触媒となったことは間違いないだろう。

### 『キケロ主義者』の分析

エラスムスの『キケロ主義者』は、初版が一五二八年三月にバーゼルのフローベン書店から公刊され、その後立て続けに三つの改訂版が刊行された<sup>(83)</sup>。この作品は、三人の登場人物、ブレフォルス、ヒュポログス、ノソポヌスによる対話篇の形式をとっている。ノソポヌス(Nosoponus、「病に苦しむ者」の意)は教条的キケロ主義者であり、彼の「病」をブレフォルス(Balephorus、「忠告をもちたらず者」とヒュポログス(Hypologus、「傍役」<sup>(84)</sup>)が対話によって癒すという筋立てである。全体は四つの部分に分けることができる。第一部はキケロ主義者の戯画、第二部はキケロ主義の批判とその修正、第三部はキケロ主義の観点による古代から人文主義までのラテン語著述家の検討、第四部は

修正されたキケロ主義・模倣論の再説である。<sup>(85)</sup>

諷刺作家エラスムスの面目躍如たる第一部では、盲目的なキケロ主義者が痛烈無残に戯画化される。ポリツイアーノにとって「迷信」だったキケロ主義は、いまや癩病や妄想にも似た「新種の病氣」(nouum mali genus)である。冒頭で、ブレフォルスとヒュポログスは、以前は太って快活だった旧友ノソポヌスの寝た姿を目にして驚く。ノソポヌスは十年來キケロの模倣に専念し、その精進がたまって瘦せ衰えてしまったのである。そこで、ブレフォルスとヒュポログスは、自分たちも同じキケロ主義の情熱に憑かれていふりをして、キケロ模倣の方法を尋き出そうとする。ノソポヌスは得意満面で話し始める。自分を駆り立てているのは、死ぬまでに「キケロ主義者」と呼ばれたいという欲求だけでなく、クリストフ・ド・ロングイユを別として、北ヨーロッパの人間にはこの呼称を認めようとしたイタリア人の傲慢な態度なのである。ここ七年間というもの、キケロ以外の書物は手にとらず、キケロの肖像を家の到るところに掛け、指輪にも彫り込んでいたので、夢の中にはキケロの姿しか現われない。キケロを模倣するに際しては、まず三種類の辞書を作成する。キケロの使った単語だけを集めたもの、キケロ特有の言い回しを集めたもの、そしてキケロが文の始め、中間、終わりに用いている韻律を集めたものである。最初の辞書には、語義の区分や引用箇所の指示ばかりでなく、動詞ならばキケロの使った時制や人称の形態だけ、名詞ならばその数や格だけを収録してある。書き物に一つでもキケロの使っていない語形が見つかったとしたら、その人間はキケロ主義者と呼ぶことはできないのだから。

では、実際に執筆するにはどうするか。天候の静穏な深夜を選んで、家の奥の、光や騒音の入って来ない、扉の頑丈な部屋に閉じこもり、愛情や野心や金の心配といった邪魔な情念を追い払って机に向かう。そのために、ノソポヌスは妻を娶らず、名誉ある官職を目指すこともしない。「私には……：：：：教皇の地位に就くことよりも、キケロ主義者で

あること、他人からもそう見なされることの方が重要なのだ」(Mihi...vel summi Pontificis regno potius est, tum esse, tum haberi Ciceronianum)。頭を明晰に保つため、執筆前に食事はとらず、干しぶどうを十粒ばかり腹に入れる。執筆に適した夜を選ぶには、占星術師の作成した星位図を用いる。友人に貸した本の返却を求める手紙を書くとして、まずキケロの書簡集を繙き、次にかねて用意した巨大な三つの辞書を参照して、語彙・言い回し・韻律をキケロに忠実に整える。一晚に一つの文を満足に書ければよい方で、さほど長くない六文からなる手紙を作成するのに六日かかるが、それで執筆作業がすんだわけではない。一日書いた手紙を十度推敲し、単語と語法と韻律について、非キケロ的なものが紛れ込んでいないように、辞書で十度確認する。さらに、数日間を置いてから再度厳密に点検するので、添削の結果、後に一語も残らないこともしばしばである。そうしている間にも問題の本は友人の手元にあるのではないか、とのプレフォルスの問いに、ノンポヌス曰く、「キケロ的でない書き物を私のものとして公表するよりも、その程度の不便を我慢する方がましだ」(Istuc incommodi malim perpeti quam aliquid a me proficisci, quod non sit Ciceronianum)。弁論の練習としては、できるだけラテン語を話さないことが肝要である。つまりらぬお喋りには「フランス語やフラマン語」(sermo Gallicus aut Batauicus)で十分であり、かの「神聖な言葉」(sacram linguam)を汚す必要はない。お祝いや悔やみを述べなければならない場合には、あらかじめ作っておいた定型句を口にする。現にしているように長い話が避けられないときは、<sup>(87)</sup>純粹なキケロの言葉を回復するために、その後一カ月読書しても足りないくらいである。このようにエラスムスは、本末を顛倒したキケロ主義者の努力を存分に笑いのめして第一部を終える。

第二部では、こうした皮相なキケロ主義の批判と真のキケロ主義への修正が行なわれる。この部分はさらに三つのセクションに分かつことが可能であろう。一、キケロおよびキケロ主義に対する攻撃、二、近代のキリスト教徒の立

場からの主張、三、修正されたキケロ主義の提示である。<sup>(88)</sup>ここからはエラスムスの代弁者プレフォルスが対話の主導権を握るが、最初のセクションは、キケロ主義を攻撃する既存の論法の集大成ともいうべき観を呈する。まず、複数のモデルを使ったゼウクシスの挿話を引いて、キケロただ一人を模範として「雄弁の似姿」<sup>(89)</sup>(*eloquentiae similitudo*)を描くべきかどうかを問う。たとえば小カトーら同時代人が指摘したように、キケロの文体にも欠点があるし、冗談や警句は拙く、簡潔さではサルステイウス、厳しさではブルトウスに及ばない。また、キケロの著作には『国家論』のように散佚したものがあるから、完璧なキケロ模倣は不可能である。さらに、キケロが書いていない主題については、他の作家から補充する必要がある。写生や無学な学者の過ちで、キケロの著作が改竄されてゴート族の言葉が混入している可能性もある。キケロの真作にドイツ人の作者の名を付したものが嘲られ、偽作にキケロの名を付したものが称讃されることはしばしばあるのだから、正確な判断ができるのか。キケロはラテン語の誤用を度々犯しているし、その自慢癖をも模倣すべきなのか<sup>(90)</sup>。批判は次にキケロ主義者の模倣法に向けられる。キケロ自身のように、われわれはあらゆる種類の作者を利用して折衷的な模倣を行なうべきではないか。それに、あからさまな模倣は、役者には向いても弁論家には適さない。キケロの「猿」たちがするように、キケロの用いた片言隻句を使って悦に入ることほど滑稽な模倣はない。それらはたまたまキケロの念頭に浮かんだだけかもしれないのだ。こういう機械的な模倣は、高潔な父親が不肖の息子によって泥をかぶせられるように、キケロを辱めるものである。<sup>(91)</sup>なほ、画家は「キケロの顔立ち」を模写すればよいのだろうか、われわれは靈魂と肉体とからなるキケロの存在全体(*totum Ciceronem*)を模倣しなければならぬ。「われわれがキケロを模写して作った似姿が、もし生命、行為、感情、筋肉や骨を欠いているとしたら、そのような模倣以上に弱々しいものがあるだろうか？」つまり、豊かな想象、聴き手を動かす力、強い記憶力、幅広い知識など、「キケロの精神」(*pectus illud Ciceronis*)がそこには必要で

ある<sup>(92)</sup>。ブレフォルスはここで、弁論は事物(主題)・人間(弁論家と聴き手)・場所と時代の三つに対して適合性(aptum postum)を持つべきだという一般的原则<sup>(93)</sup>を提示して、次のセクションへ移行する。

第二部の第二セクションでは、弁論の適合性という規則に導かれて、エラスムス独自の歴史的・宗教的議論が展開される。現代に行なわれる弁論は、現代の人間や事物に適合していなければならないのに、キケロの時代の仕方で行なう必要がなぜあるのか? それならば古代ローマのもるもるの制度を復活させる方が先決ではないか? 「人間にかかわる事柄の様相があらゆる点ですっかり変化しているのだから、キケロとはまったく違った流儀で行なうのであれば、誰が今日適合した弁論をすることができらるうか?」キリスト教徒であるわれわれは、キリスト教徒に向かって、キリスト教について話さなければならないのだ。この後に、ブレフォルスエラスムスがローマで(おそらく一五〇九年に)聴いたキリストの死についての演説の挿話がはさまれる<sup>(94)</sup>。このキケロ主義者の弁論家は、かくも悲劇的な主題を扱うのに、異教的な比較を用いて、自らの雄弁の技巧を誇示しようとしたために、まったく無意味な弁論を行なった。現代の人間は、キケロの語彙にはないにもかかわらず、「イエス・キリスト」、「神の言葉」、「三位一体」のような表現を使わなければならない。キケロ主義者がするように、父なる神を「至善至高のユピテル」、イエスを「アポロン」、聖母を「ディアナ」などと呼ぶのは馬鹿げている。われわれは文章の飾りに異教の詩人を利用する一方で、聖書からの引用を交えるのは優雅ではないとして軽蔑する。だが、聖書には異教文学にまさる雄弁な表現があるのだ。このようなことが起こるのは、われわれが名目上のキリスト教徒にすぎず、実は異教を崇拜しているためにほかならない。「われわれは異教崇拜を公言する勇氣がないので、キケロ主義者という呼称を口実に使うのである」(Paganiatatem profiteri non audemus, Ciceroniani cognomen obtendimus)<sup>(96)</sup>。

こうして誤ったキケロ主義を批判し、ローマの人文主義者に攻撃を加えた上で、第三セクションでは、真のキケロ

主義とは何かが説かれる。「各々の人間の精神は、何かある独自の生来のものを持っている」(Habent singula mortuum ingenia suum quiddam ac genuinum) のだから、キケロの精神と異質な精神の持ち主がキケロを模倣しようとするのは無駄なことである。それに、異質 (dissimilis) ではあれキケロと同等 (par) になればよいので、無理に類似 (similitudo) を求める必要はない。模倣はキケロ全体を対象とすべきだが、キケロの全体とは、(その著作ではなく) キケロという人間そのものにはしかなない。だから、「もし君がキケロの存在全体を模倣しようと思むなら、君自身の存在を写し出すことはできない。もし君自身の姿を写し出さないとしたら、君の文章 (Oratio) は嘘をつく鏡 (mendax speculum) になるだろう」。文章とは、つまるところ、それを書く人間の精神をそのまま映す鏡のようなものである<sup>(97)</sup>。では、真のキケロ主義者とは誰なのか。「キケロが異教の哲学に励んだのと同等の熱意をもって、キリスト教哲学を知ること努力する人間……こうした〔キリスト教についての〕研究すべてから得たものを、〔弁論・文章を作る際に〕現代の事物に適合させる人間、この人間こそ、ある正当性をもって、キケロ主義者という呼称を手に入れることができるだろう<sup>(98)</sup>」。何よりも、雄弁の糧として多様な知識を獲得すること、長年の読書で得たものをよく消化し、自らの血肉に変えること、蜜蜂が体内から蜜を生み出すように、文章を自己の内から生み出すことが重要である<sup>(99)</sup>。

第三部では、古代からエラスムスの時代に到るラテン語作家が四十六頁にわたって列挙されるが、その目的は、その中に誰一人「キケロ主義者」と呼べる著述家がないことを検証するところにある。共和制・帝政期ローマから教父時代を経て、イタリア、フランス、イングランド、デンマーク、ネーデルラント、ドイツ、ハンガリー、ポーランド、スペイン、ポルトガルの重要な人文主義者が次々に挙げられ、三人の登場人物が彼らのラテン語の文体を吟味するが、程度の差こそあれ、そのどれもキケロの文体を模写しているとは言えない。とすれば、ノソポヌスもキケロ主



義者ではないという不都合を我慢しやすくなるだろう。<sup>(10)</sup> この概括的なリストの後では、ロングイユの著作がやや詳しく論じられ、第二部第二セクションの適合性の議論がその具体的な批判に適用されている。

最後の第四部は、すでに展開された、人間の個性が多様であり、文章がその人間の精神を映す鏡であるという論旨を再び説くとともに、この所論の事実上の典拠と言つてよいポリツィアーノ・コルテージの書簡をほぼ逐語的にパラフレーズして、反キケロ主義者のポリツィアーノの方が、逆説的なことに、キケロ主義者のコルテージよりもよくキケロを模倣していることを主張する。<sup>(11)</sup> では、キケロとその模倣とについての、対話篇全体の結論はどういうものか。まず、キケロが最高の弁論家であり、ほとんど聖人にも比敵する善良な人間だったことが明瞭に述べられる。<sup>(12)</sup> 修辞の上では、キケロに自分を似せようとするのではなく、異質であっても同等になり、さらにはキケロを凌駕するような努力すべきこと、そしてあらゆる作者から最良のものをとるべきであり、キケロ以外の書物は読もうとしない「神経質な気難しさ」(fastidiosa morositas)を捨て去るべきことが説かれる。しかし、最も重要なのは、現代に生きるキリスト教徒として言葉を使うこと、そして措辞よりもむしろ事物の知識である。「キリスト教徒でなくなるような流儀でキケロ主義者になる人間は、実はキケロ主義者でさえない。なぜなら、彼は適合した仕方では弁論を行わず、話している事柄を深く理解せず、語っている主題に心を動かされていないからだ」。われわれはキケロの本質を模倣すべきであり、その本質とは、「言葉や文章の表面ではなく、題材と思考の内容、精神と判断力に存するのである」。<sup>(13)</sup>

#### エラスムスへの反応

それでは、『キケロ主義者』におけるエラスムスの主張を要約すればどうなるか。まず、狭い意味での修辞学・模倣論に関しては、エラスムスは、ポリツィアーノの折衷主義的模倣論を継承して、各人が独自の文体を創出すべきこ

とを説いたが、これは独創的な主張ではない。(ヴァッラ、ポリツィアーノ、エラスムスには、修辞学におけるクインティリアヌスへの好尚、文献学上の革新など、共通点あるいは一種の系譜を見てとることができる。) エラスムスの独自性は、むしろその歴史的・宗教的な議論にある。『キケロ主義者』は、十六世紀のキリスト教世界に生きる人間が、まるで自分が古代ローマ人であるかのように錯覚して、紀元前一世紀の異教世界の言語表現だけに固執することの愚かしさを指摘した。十五世紀イタリアの文献学者は、古代と中世の、また古代の各時期の相違に対する歴史的感覚を発達させたが、エラスムスのように、古代と近代との根底的差異を鋭く意識することはなかっただろう。ローマの人文主義者を異教崇拜者と決めつけたエラスムスの非難は幾分誇張されていたかもしれないが、模倣論におけるその歴史的・宗教的議論の導入の新しいさは明らかであろう。

『キケロ主義者』が出版されると、たちまちヨーロッパ中で反響を呼び、とりわけイタリアとフランスからは激しい敵対的反応が現われた。<sup>(10)</sup> イタリア人、特にローマからの敵意は当然予想されたことだが、フランスでの否定的反応は、本筋ではない第三部の人文主義者のリストにかかわっていた。<sup>(11)</sup> 総じて、『キケロ主義者』の中心的部分である歴史的・宗教的議論は、当時の読者には十分に理解されなかったようである。<sup>(12)</sup> 最後に、十六世紀の模倣論の文脈に『キケロ主義者』を位置づけてみよう。エラスムスの所論を延長すれば、ラテン語は(その後発達した)近代諸俗語に似た、書き手の人格を表現し、いかなる目的にも応用できる、俊敏な一種の「共通言語」となっただろうし、他方で、キケロ主義者はラテン語を、変化することを止めた神聖な「古典語」と見なして、俗語と併用しつつ、用途に応じて両者を使い分けようとした(『キケロ主義者』第一部でのノソポヌスはまさにこの態度を例示している)。その後の歴史的發展を見れば、キケロ主義者がいわば勝利を収めたことは明らかであろう。同時に、十六世紀中葉以降には、模倣の原理をめぐって論争が戦わされるのではなく、キケロを最良の模範と認めた上での技術的な模倣指南書が数多く

出版された。しかし、十六世紀におけるラテン語と俗語との関係、また技術的な模倣論については、ここで論じることはできない<sup>(8)</sup>。

本稿の準備段階で、この主題について討論するとともに文献の指示を下なした、ロンドン大学ウォーバーグ研究所のシル・クレイ先生に感謝の意を表したい。(I would like to thank Dr Jill Krave of the Warburg Institute, University of London, who, during the gestation of this paper, kindly discussed the topic with me and gave me bibliographical orientation.)

ラテン語テキストの引用は、すべて底本の原文により、綴字・句読点の統一は行なわなかった。ただし十六世紀の刊本から引用する場合、アクセント記号は除き、略字は( )や<sup>o</sup>を含めて一般的に綴りに直した。引用文中の〔 〕は筆者による補注である。

(1) 人文主義全般、伝播、隣接する諸領域については、次の二つの概説書を参照。A. Rabil, Jr., ed., *Renaissance Humanism: Foundations, Forms, and Legacy*, 3 vols., Philadelphia, 1988; J. Krave, ed., *The Cambridge Companion to Renaissance Humanism*, Cambridge, 1996. また、次の簡潔な論考をも参照。P. O. Kristeller, "Humanism", in Ch. B. Schmitt et al., eds., *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, Cambridge, 1988, pp. 113-37.

(2) ルネサンスの文献学史としては、次の二冊の該当箇所を参照。R. Pfeiffer, *History of Classical Scholarship from 1300 to 1850*, Oxford, 1976; L. D. Reynolds and N. G. Wilson, *Scribes and Scholars*, 3rd ed., Oxford, 1991. 人文主義者の文献学者としての活動については、以下の文献を参照。R. Sabbadini, *Il melodo degli umanisti*, Florence, 1922; S. Rizzo, *Il lessico filologico degli umanisti*, Rome, 1973; A. Grafton, *Joseph Scaliger*, Vol. 1, Oxford, 1983; J. F. D'Amico, *Theory and Practice in Renaissance Textual Criticism*, Berkeley, 1988. 現代の古典学者から見た人文主義者のテキスト校訂の問題点については、

- 次書° E. J. Kenney, *The Classical Text. Aspects of Editing in the Age of the Printed Book*, Berkeley, 1974. 写本の発見・翻記・注釈について、それぞれ以下の文献を参照。R. Sabbadini, *Le scoperte dei codici latini e greci ne' secoli XIV e XV*, ed. E. Garin, 2 vols., Florence, 1967. L. D. Reynolds, ed., *Texts and Transmission. A Survey of the Latin Classics*, Oxford, 1983. P. O. Kristeller, F. E. Cranz and V. Brown, eds., *Catalogus translationum et commentariorum*, 7 vols. to date, Washington, D. C., 1960-.
- (3) 大抵は、その人文主義について、次の論文を参照。W. Rugg, "The Rise of Humanism", in H. de Ridder-Symoens, ed., *A History of the University in Europe. I: Universities in the Middle Ages*, Cambridge, 1992, pp. 442-68.
- (4) J. F. D'Amico, "Humanism and Pre-Reformation Theology", in Rabil, *Renaissance Humanism*, 3349-79.
- (5) ルネサンスにおける修辭学については、次の論文を参照。J. Montasani, "Humanism and Rhetoric", in Rabil, *Renaissance Humanism*, 3:171-235. 人文主義者の "orator" としての自覚について、次の論考を参照。G. Billanovich, "Auctorista, humanista, orator", *Rivista di cultura classica e medioevale*, 7, 1 (1965), 143-63.
- (6) J. Hankins は次書で「十五世紀の読書の類型化」の一類型として「模倣的読書」(imitative reading) を挙げている。Plato in the Italian Renaissance, 2 vols., Leiden, 1990, 1:21-3. Cf. G. W. Pigman, "Barzizza's Treatise on Imitation", *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, 44 (1982), 341-52.
- (7) キケロ主義者ロルネーシから見ると、セユラルカの文章はトホク語ではなう (huius sermo nec est Latinus et aliquando horridior) が、これは最悪の時代に生れた (homini in faece omnium saeculorum nato) かも知、致し方なく。トネーリは最初の韻律の整った文章を書いた (hic primus inconditam scribendi consuetudinem ad numerosum quandam sonum inflexit) が、やせいの時代のため欠陥多し (vitium... corrupte loquendi aetati illi tribuas) として、P. Cortesi, *De hominibus doctis*, ed. G. Ferrau, Palermo, 1979, pp. 114, 117-8, 121.
- (8) 模倣について以下の文献を参照。H. Gmelin, "Das Prinzip der Imitatio in den romanischen Literaturen der Renaissance", *Romanische Forschungen*, 46 (1932), 83-360; F. Ulivi, *L'imitazione nella poetica del Rinascimento*, Milan, 1959; G.

- W. Pigman III, "Versions of Imitation in the Renaissance", *Renaissance Quarterly*, 33(1980), 1-32; M. L. McLaughlin, *Literary Imitation in the Italian Renaissance*, Oxford, 1995.
- (9) *Prosalori latini del Quattrocento*, ed. E. Garin, Milan, 1952, pp. 594-600, at 596; 598: "Qui enim summi philosophi fuerunt, summi oratores, summi iurisconsulti, summi denique scriptores? nempe ii qui bene loquendi studiosissimi"; 598; 598-600: "Quousque tandem Quirites...urbem nostram, non dico domicilium imperii, sed parentem litterarum, a Gallis captam esse patiemini? id est latinitatem a barbaria oppressam? Quousque profanata omnia duris et paene impiis aspicietis oculis?"
- (10) *Ibid.*, pp. 606-12, at 608: "Quid de illis loquor? ego, mediocri ingenio et mediocri literatura praeditus, profiteor me omnes qui ius civile interpretantur ipsorum scientiam edocurrum."
- (11) *Ibid.*, pp. 612-22, at 612; 614; 620: "qui in omni aetate praeliosas illas divini eloqui gemmas auro argenteoque eloquentiae vestierunt, neque alteram propter alteram scientiam reliquerunt"; 620: "Qui vero eleganter loqui nescit, et cogitationes suas literis mandat, in theologia praesertim, impudentissimus est; et si id consulto facere se ait, insanissimus"; 622.
- (12) 「市民的」人文主義については、次の論文を参照。A. Rabl, Jr., "The Significance of 'Civic Humanism' in the Interpretation of the Italian Renaissance", in Rabl, *Renaissance Humanism*, 1:141-74.
- (13) 学校教育たまたまキケロ模倣の実態については、次書を参照。P. F. Grendler, *Schooling in Renaissance Italy: Literacy and Learning, 1300-1600*, Baltimore, 1989, pp. 212-29.
- (14) 弁論家キケロへのクインティリアヌスの評価については、『弁論家の教育』10・1・105-111を参照。
- (15) より広いキケロ受容史については、次書を参照。Th. Zielinski, *Cicero im Wandel der Jahrhunderte*, Leipzig and Berlin, 1908.
- (16) キケロ主義論争に関しては、次の二つの古典的研究が有名。R. Sabbadini, *Storia del Ciceronianismo...*, Turin, 1885,

- pp. 1-74. I. Scott, *Controversies over the Imitation of Cicero...*, New York, 1910. また、人文主義的マニソ語の歴史を論じた次の論考を参照。J. F. Damico, "The Progress of Renaissance Latin Prose: The Case of Apuleianism", *Renaissance Quarterly*, 37 (1984), 351-92.
- (17) イタリヤにおけるギリシマ学については、次書を参照。N. G. Wilson, *From Byzantium to Italy: Greek Studies in the Italian Renaissance*, London, 1992.
- (18) 人文主義者の競争については、次書を参照。A. Gratton and L. Jardine, *From Humanism to the Humanities: Education and the Liberal Arts in Fifteenth- and Sixteenth-Century Europe*, London, 1986, esp. pp. 58-98.
- (19) ホリシマブーノに関する総合的研究については、次の二冊を参照。I. Mater, *Angelo Poliziano: la formation d'un poète humaniste (1469-1480)*, Geneva, 1966; V. Branca, *Poliziano e l'umanesimo della parola*, Turin, 1983. 簡略な伝記については、次のものを参照。E. Bigli, "Ambrogini, Angelo, detto il Poliziano", *Dizionario biografico degli Italiani* [以下 DBI と略記する], Vol. 2, pp. 691-702. 434 Mater, *Poliziano*, pp. 419-38 は詳細な年譜がある。
- (20) キリシマ学におけるホリシマブーノの貢献に関しては、Wilson, *From Byzantium to Italy*, pp. 101-13 を参照。
- (21) 『雑録』第一集からの引用は、現在一般に用いられる「流布本」次の十六世紀のバーゼル版『全集』を底本とする。
- 『Miscellaneorum Centuria Prima』, in *Angeli Politiani Opera...*, Basle, 1553, [facsimile reprint, Turin, 1971.] pp. 213-311. 『雑録』の独創性については、次の論文を参照。A. Gratton, "The Scholarship of Poliziano and Its Context", in Gratton, *Defenders of the Text*, Cambridge, Mass., 1991, pp. 47-75. 本節の以下の記述も、Gratton の論文に多くを負っている。なお、次の論文中に、一四八九年フィレンツェ初版本に基づく『雑録』第一集の批評校訂版があり、参照した。片山英男「Miscellanea 研究」『東京大学文学部研究報告』第七号（一九八二年）二九三—五五四頁。（この文献は、横山裕人氏のご尽力により入手できたことを記して、感謝の意を表する。）第二集の批評校訂版は、次書。A. Poliziano, *Miscellaneorum Centuria Secunda*, ed. V. Branca and M. Pastore Stocchi, Florence, 1972.
- (22) *Opera*, pp. 213-4, p. 215: "Quo pacto uel durare ultra, uel esse iam poterit honestarum literarum sinceritas, soluta

- penitus censura, dum sic aequae omnes inuidiam perhorrescimus?"; ibid.: "Vidi, vidi ipse libelle, cottidieque video multa in literis fieri capitalia, compilari subdole aliena, conungi ad libidinem, quae cui commodum, ascribi etiam idoneis, quae nec agnoscant, allegari qui non extant auctores, citari quinequam pro vetustis, nullibi comparantes codices, ...pollui, adulterari, oblini, incrustari, distorqueri, confundi, praecipitari, interverti omnia, nulla fide, nullo nec pudore, nec iudicio..."
- (23) エンシエオ・カルデリーニ、ニコロ・スロッチャー、シリオ・ボンビニオ・レートなど人文主義者による典拠の「捏造」等々の例については、Grafton, "Scholarship of Poliziano", pp. 53-5 を参照。
- (24) *Opera*, pp. 258-60 (cap. xxxix); pp. 246-7 (cap. xxv); pp. 286-7 (cap. lxxvii); pp. 301-4 (cap. xc).
- (25) Cf. Grafton, "Scholarship of Poliziano", pp. 57-64; Reynolds and Wilson, *Scribes and Scholars*, pp. 144, 210.
- (26) ガザの訳文。"Puerorum quoque motio mentis idem hoc explicat, et eruplio ulcerum, quae mortem interdum antecedit." キリント語原文。"καὶ ἡ περὶ τῶν παιδῶν ἐκστασις καὶ ἡ πρὸ τῆς ἀφαιρέσεως αὐτῶν ἐν τῇ ἐκκῶν ἐκφύσις γενομένη." ミニャーノの訳文。"Et in liberos suos pavor, seu maus dicere, mentis excessus, et ante obitum ipsius in Oeta ulcerum eruplio." キリント語原文。"Ἐν ἐν Ὀρετῶν ἔκρηξις." Cf. Wilson, *From Byzantium to Italy*, p. 106.
- (27) "Oratio super Fabio Quintiliano et Statii Sylvis", in *Prosatori latini del Quattrocento*, pp. 870-84. この選文集は、キリツィアーノのテクストについては一四九八年のアルト版『全集』に基づいて、冒頭近くの "qui eis maxime scribitur scriptores praelegamus, quo" (p. 870) は難読である。一五五三年バーゼル版の読み "eius...seculi" を参照。奇妙なことに、右ページのイタリナ語訳は "leggiamo scrittori di un tempo in cui" (p. 871) と、むしろバーゼル版に合致した内容となっている。一四八〇―八一年度から九三―九四年度までのキリツィアーノの講義の一覧表は、Branca, *Poliziano*, p. 86, n. 22 を参照。
- (28) Cf. A. Field, *The Origins of the Platonic Academy of Florence*, Princeton, 1988, pp. 231-68; Grafton and Jardine, *From Humanism to the Humanities*, pp. 94-7. キリント語原文の地位は、やがてランディーノのそれを追いついた。一四八〇

年のポリツィアーノの報酬は一〇〇フロリン、ランディーノは三〇〇フロリン。一四九四年には、それぞれ四五〇フロリンと三〇〇フロリンになった。

(29) *Prosatori latini*, pp. 870, 876.

(30) ルクレティウス『事物の本性について』三・一一―一二から引用。模倣論における「蜜蜂」の比喩のもう一つの重要な典拠として、セネカ『道徳書簡集』八四・三をも参照。

(31) *Prosatori latini*, p. 878; *ibid.*: "Maior certe cultus in secundis est, crebrior voluptas, multae sententiae, multi flores, nulli sensus tardi, nulla iners structura, omninoque non tantum sani quam et fortes sunt omnes et laeti et alacres et pleni sanguinis atque coloris"; *ibid.*: p. 880.

(32) こうした折衷主義的模倣論は、クインティリアヌス『弁論家の教育』一〇・二・一一―二八(特に二四―二六)で主張されている。ポリツィアーノは第二六節からほぼ逐語的に引用している。また、自らの文体の折衷主義的な「多様さ」へのポリツィアーノの(諸誰を交えた)率直な言及として、「書簡集」全体の序言をなすピエロ・デ・メディチ宛書簡(*Opera*, pp. 1-2)を参照。

(33) こちらの書簡も日付を持たないため、状況証拠により年代を推定するほかない。I. Scott は幅を広くとって一四八〇年と九〇年の間と(『*Controversies*, p. 19, n. 13』; J. F. D'Amico と M. L. McLaughlin は「*Coltoreggi*」の他の著述中の書簡への言及により、それぞれ八〇年代末("Progress of Renaissance Latin Prose", p. 371, n. 72)と八五年以前(*Literary Imitation*, p. 202, n. 42)とする。『雑録』「序言」の「キケロを十頁繰り返し読むだけで他には何も知らない」(qui decem tantum Ciceronis paginas, nihil praeterea lectionaverit) (*Opera*, p. 214)人々への軽蔑的な言及には、書簡の記憶があるのかもしれない。だとすれば八九年以前(『雑録』は八九年一月にはすでに印刷に入っていた。出版は同年九月。Cf. Mater, *Politien*, p. 429)の近い時期と推測できるが、ポリツィアーノが論争したキケロ主義者はコルテージだけではないから、これは確実な根拠ではない。後注(36)をも参照。

(34) 往復書簡からの引用は、*Prosatori latini*, pp. 902-10を底本とする。



- (35) *Ibid.*, p. 902. 十五・十六世紀の模倣論文獻において、「キケロを模倣する」と言うときに普通使われる表現は「Ciceronem/lineamenta Ciceronis exprimere/effingere」だが、これは、本来の絵画的言語としては「キケロ（の顔立等）を描き出す・再現する」という意味であり、修辭学に応用されれば「キケロ（の文体）を模倣・模写する」となるだろう。つまり、ある著述家を模倣するとはその肖像を描くことにはかならないという理解が基礎にある。Cf. *Oxford Latin Dictionary*, Oxford, 1982, s.v. "exprimo", 6; "effingo", 2, 3. (おほむ用いられぬは「Ciceronem imitari」は「厳密には「キケロの言行に倣う」ということになるのであらう。))この他にも「ルネサンスの修辭学・模倣論では視覚的・造形芸術的な隱喩や類比がしばしば援用される。興味深い問題だが、いまは立ち入らない。次書を参照。M. Baxandall, *Gioto and the Orators*, Oxford, 1971, esp. pp. 24-44. ポリツィアーノはこうして「exprimere」の二重の意味を意識しつつ、言葉遊びを交えて「私はキケロの姿を描く＝模倣するのではなく、自分の姿を文章に写し出しているのだ」と主張するのである。Garinの訳「to esprimo me stesso」(*Prosalori latini*, p. 903)とMcLaughlinの訳「I express my own self」(*Literary Imitation*, p. 203)は誤るとは言えなからやや粗雑である。M. Fumaroliの訳「C'est moi, me semble-t-il, que mon discours représente」(*L'Age de l'éloquence*, Geneva, 1980, p. 83, n. 80)がよくヒュマンズを伝えている。差異は微妙だが、「自己表現」という動的＝表現主義的な連想のある解釈よりも、静的＝絵画的な解釈を選ぶべきだろうと思う。写し出される「自分」とは何か、と尋ねられたならばポリツィアーノは「深遠な学識、多岐にわたる読書、長年の経験」と答えたであらう。この視覚的な類比に基づくポリツィアーノの模倣論は、後述するように、やがてエラスムスによって敷衍される。
- (36) 先達の人文主義者のラテン語文体に評価を下した、コルテージの「学識ある人々について」(一四八九—九〇年頃執筆)への言及であらうか？ 前注(7)、(33)を参照。
- (37) *Prosalori latini*, p. 902; p. 904: "Sed cum Ciceronem, cum bonos alios multum diuque legens, contriveris, edidiceris, concoxeris et rerum multarum cognitione pectus impleveris, ac iam componere aliquid ipse parabis, tum... sollicitudinemque illam morosam nimis et anxiam deponas effingendi tantummodo Ciceronem tuasque demique vires universas perclitioris." 典拠を消化して自分の養分とすべきことは「セネカ『道德書簡集』八四・六一七に見える。

- (38) コルテージ宛の書簡には、おそろしく他のキケロ主義者このやりとりからも生まれたのであらうキケロ主義への強い敵意が表われているが、ポリッミアーンはキケロ自身に敵対していたのではないことは、言うまでもない。『雑録』第一章では、マルキョロブロスの批判に抗して、「ラチン語の豊かちの生みの親であり第一人者」(latinae copiae genitor et princeps) である「われらがキケロ」(noster Cicero) のキリンア語・アリストテリス哲学の知識を擁護しつつあるのではある (Opera, pp. 224, 228)。 Cf. J. Krave, "Cicero, Stoicism and Textual Criticism. Poliziano on *carthago*", *Rinascimento*, 23(1983), 79-110.
- (39) もっとも、キリンミアーンの文証をほぼ逐語的に繰り返すこの箇所では、Sabbadini は、われわれ、キリンミアーンの "remitto", "omnino paucas", "a docto aliquo" (p. 902) を、"コルテージがそれぞれキケロ風の表現 "redditus", "perpaucorum", "ab aliquo docto" (p. 904) に「添削」しつつあるのび、痛烈な皮肉が込められているのかも知れない。 Cf. Sabbadini, *Storia del Ciceronianismo*, pp. 40-1.
- (40) *Prosalori latini*, p. 906: "cum viderem eloquentiae studia tandiu deserta iacuisse, et sublatum usum forensem, et quasi nativam quandam vocem deesse hominibus nostris, me saepe palam affirmasse nihil his temporibus ornate varietque dici posse, nisi ab iis qui aliquem sibi praeponebant ad imitandum."
- (41) *Ibid.*, p. 906. 「父親」=「子供」の比喩は、ヤネカ『道徳書簡集』八四・八、より直接には、ストラルカの『近親書簡集』二二・一九・一一―一二に類する。 F. Petrarca, *Le familiari*, Vol. 4, ed. U. Bosco, Florence, 1942, p. 206.
- (42) *Prosalori latini*, p. 910: "illi ipsi, qui se niti dicunt ingenii sui praesidis et viribus, facere non possunt quin ex aliorum scriptis eruant sensus et inferant suis, ex quo nascitur maxime viliosum scribendi genus, cum modo sortidi et inculti, modo splendidi et florentes appareant"; *ibid.*: "Nec minus huius corruptae orationis asper concursus aures ferit, quam ruentium lapidum fragor aut strepitus aut quadrigae transcurrentes"; *ibid.*
- (43) D'Amico, "Progress of Renaissance Latin Prose", pp. 355-60.
- (44) 『ネロ・ロマネーの日記について』以下の文献を参照。 R. Ricciardi, "Cortesi, Paolo", *DBI*, Vol. 29, pp. 766-70; J. F. D'Amico, *Renaissance Humanism in Papal Rome*, Baltimore, 1983, pp. 76-81.

- (45) 『神学命題論』(1517) D'Amico, *Renaissance Humanism in Papal Rome*, pp. 144-68. 「アトネイマス主義」(1517) は、idem, "Progress of Renaissance Latin Prose" を参照せよ。
- (46) ローマの人文主義、教皇庁と人文主義者の関係「ローマ・マカゼー」等については、J. F. D'Amico の以下の三つの論著を参照。"Humanism in Rome", in Rabil, *Renaissance Humanism*, 1:264-95; *Renaissance Humanism in Papal Rome, Roman and German Humanism, 1450-1550*, Aldershot, 1993.
- (47) Cf. J. Montfasani, *George of Trebizond: A Biography and a Study of his Rhetoric and Logic*, Leiden, 1976, pp. 69-113; Wilson, *From Byzantium to Italy*, pp. 76-85.
- (48) Cf. D'Amico, "Humanism in Rome", pp. 279-82.
- (49) シャンフランチェスロ・ピコの伝記・思想については、次の基本的研究を参照。Ch. B. Schmitt, *Gianfrancesco Pico della Mirandola (1469-1533) and his Critique of Aristotle*, The Hague, 1967.
- (50) 晩年のジョヴァンニ・ピコの極度の唯信論的傾向を示す、また彼のシャンフランチェスロ・ピコへの影響の性格を説明している文書として、前者から後者への次の一四九二年五月一五日付の書簡がある。 *Prosalori latini*, pp. 824-32.
- (51) 近代の懐疑主義については、次書を参照。R. H. Popkin, *The History of Scepticism from Erasmus to Spinoza*, Berkeley, 1979.
- (52) シャンフランチェスロ・ピコの哲学における懐疑主義的思想と、修辞学におけるその反キケロ主義との関連をめぐっては、Schmitt の前掲書を含めて、十分な説明を試みた論者がない。この関連については、やはりジョヴァンニ・ピコのエルモラオ・バルバロ宛一四八五年六月の書簡 (*Prosalori latini*, pp. 804-22) からの影響がしばしば引き合いに出されるが、ジョヴァンニの書簡は、古典的な雄弁・修辞学を偏重する人文主義者に対してスコラ哲学とそのラテン語を擁護しており、模倣論の文脈でキケロ主義を批判するシャンフランチェスロ・ピコの書簡の主題とはややずれがある。
- (53) ビエトロ・スッコの伝記として、次の記事を参照。C. Dionisotti, "Bembo, Pietro", *DBI*, Vol. 8, pp. 133-51.
- (54) Cf. D'Amico, *Renaissance Humanism in Papal Rome*, pp. 29-30, 34.

- (55) 往復書簡からの引用は、次の批評校訂版を底本とする。 *Le epistole "De imitatione" di Giovanfrancesco Pico della Mirandola e di Pietro Bembo*, ed. G. Santangelo, Florence, 1954. ※わざわざ次の書評を参照しよう。 R. Spongano, in *Giornale storico della letteratura italiana*, 131 (1954), 427-37. 前掲校訂版の編者 Santangelo は一五二八年バーゼル版を初刊本とするが Spongano はバーゼル版に先行するとうとう刊本（出版地）出版年の記載なし。ロープ、一五四一―一五五〇年頃と推定している）を発見し、そこから採じた若干の修正を提案している。論争の内容に関する議論としては、以下の文献を参照。 G. Santangelo, *Il Bembo critico e il principio d'imitazione*, Florence, 1950, esp. pp. 59-87; C. Dionisotti, "Introduzione", in P. Bembo, *Prose e rime*, ed. Dionisotti, Turin, 1960, pp. 36-9.
- (56) Santangelo, "Introduzione", in *Le epistole*, pp. 1-4. ホンポニオ・レート、パオロ・コルテージ、ヨハン・クリミンの「ローマ・アカデミー」の歴代の主催者の一人ロロッチは、写本の蒐集家としても有名だった。 Cf. "Colocci, Angelo", *DBI*, Vol. 27, pp. 105-11. 上の記事も Dionisotti, "Bembo" も、ロロッチ論争とロロッチとの関連については触れつつながら、往復書簡の唯一の写本がロロッチの旧蔵書だった (cf. "Introduzione", in *Le epistole*, pp. 10-1) ことが、関連の有力な証拠となるかも知れない。
- (57) *Le epistole*, pp. 27-8, at 27; 27: "ideam... ut aliarum virtutum, ita et recte loquendi subministrat [sc. natural], eiusque pulchritudinis affingit animo simulachrum: ad quod respicientes identidem et aliena iudicemus et nostra"; 28: 28: "sive ea ipsa penitus innata sit idea, atque ab ipsa origine perfecta, sive tempore procedente mulitorum auctorum lectione consummata."
- (58) 文体上の好尚の多様性の気質による説明は、第一信の末尾でも (p. 35-6) ヒッポクラテスの名を挙げているとおり、医学理論に基づいているのである。
- (59) *Le epistole*, pp. 64-8, at 68: "Ex animo itaque qui trahunt suo, et qui ex multis aliorum in eloquendo virtutibus unum quasi corpus eloquentiae conficiunt: ii optime dicuntur imitari."
- (60) 古代の権威に対するこの文献学的手法による攻撃は、後年の著作『異教徒の学知の空しさの検討』における「アリストテ

- 「ルネサンス」の真正性への攻撃と軌を一にしており、懷疑主義の実際の適用と言えるかもしれない。ジャンフランチェスコ・ピコは「マリストトラレヌス文書」の真正性に疑念を呈した最初の学者の一人だという。Cf. Schmitt, *Gianfrancesco Pico*, pp. 59-60, 63-7, at 63, n. 35; J. Krayer, "Like Father, Like Son: Aristotle, Nicomachus and the *Nicomachean Ethics*", in F. Dominguez et al., eds., *Aristotelica et Lulliana...* Bruges and The Hague, 1995, pp. 155-80, at 158-61.
- (16) *Le epistole*, pp. 30-1. 提案へのユリウスの論調は、措辞に力点を置くシンホと対照的である。後注(7)を参照。
- (17) *Ibid.*, pp. 31-3, at 31. ユリウスは第二信でも「近代人の古代に関する無知を強調する」(pp. 72-3)。
- (18) *Ibid.*, pp. 33-5.
- (19) *Ibid.*, pp. 35-7. 第二信では「固有の精神の傾向」に従って執筆した著述家として「ヘルモラキ・ヌルンロ・シヨヴァンニ・ユロ」キリツィマーノ・チネトロス・ガキの名を挙げている(pp. 74-5)。
- (20) *Ibid.*, pp. 40-2, at 41: "eius scripti simulacrum, quod sit pulcherrimum et perfectissimum, nobis proponere debemus, in quo effingendo studium et diligentiam adhibeamus." 上の箇所(pp. 40-1)でシンホは「キリツィマーノ・ニコルネーシ論等に言及して、キリツィマーノは学識と才能を備えた人物だがあまり思慮がなく(non multum prudentis)」、自分にはキケロの文体を模倣できないことを悟って、キケロ主義者を非難したのだ」と述べている。ユリウスは第二信(p. 63)でこれに反論して「キリツィマーノはその気になればどんな作者でも模倣できたであろう」(potuisse illum existimo quemcumque voluisset scriptiorem effingere)と論じている。
- (21) *Ibid.*, pp. 42-3, at 42: "nullam me in eo [sc. meo animo] stili formam, nullum dictandi simulacrum antea in-spexisse, quam mihi ipse mente et cogitatione legendis veterum libris, multorum annorum spatio, multis laboribus ac longo usu exercitationeque confererim."
- (22) *Ibid.*, p. 45: "Imitatio autem quia in exemplo tota versatur, ab exemplo petenda est: id si desit, iam imitatio esse ulla qui potest?"
- (23) *Ibid.*, pp. 45-9, at 46: "Imitatio autem totam complectitur scriptiois alicuius formam, singulas eius partes assequi

postulat: in universa stili structura atque corpore versatur. "多様な模範の「新奇な」(novitas)、「異質な」(diversitas)「多様な」(varietas)「またそこから生じる文体の矛盾 (dissimilis, inconcinna, parum coherens) につづつての表現の選択は、コルネージのように、ポリツィアーノの折衷主義を標的にしているように見える。前注 (32)、「(42) を参照。

(69) *Ibid.*, pp. 49-54.

(70) 最初に凡庸な模範を選ばず最高作者への移行が容易になる (sin... medicribus me tradidisssem, equidem sperabam fore, ut cum ab illis quantum vellem proficissem, et facilior mihi esset et plane tutor ad eos transitus, qui primi haberentur [p. 51]) とどう考え方については、ポリツィアーノの「クインティリアヌスとスタチウスについての弁論」(前注 (29)) を参照。

(71) *Ibid.*, pp. 54-5, at 55: "mihi eius fortasse vita non usquequaque probabatur: orationis autem et stili ratio nihil improbabatur: qui esse optimus in vita non optima potest." 作者の人格と文体の卓越性への評価のこうした分離は、ブルエの時代には起りえなかつたであろう。これはまた、模倣の技術化への傾向を示す徴でもあろう。

(72) *Ibid.*, pp. 56-7. ただし、模倣した上に凌駕しようする対象とは、人格を備えた個人というよりむしろ、そこから抽象され理想化された文体と考えるべきでない点に注意すべきであろう。キケロ以上に「キケロ」になるとは一体どういうことだろうか？

(73) *Ibid.*, pp. 57-8.

(74) *Ibid.*, p. 58: "ut quae mutuati sumus ipsi, ea splendiora illustrioraque nostris in scriptis, quam in eius, a quo sumimus, conspiciantur: ut non minor in exornando laus, quam in inventendo fuisse videatur", p. 59: "multoque plus in victoria gloriae, quam in inventione possuisse videatur." この想案重視については、前注 (61) を参照。

(75) 北ヨーロッパにおける修辞学については、次の論考を参照。Montasani, "Humanism and Rhetoric", pp. 196-205.

(76) "De duplici copia verborum ac rerum commentarii duo", ed. B. I. Knott, *Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, Vol. I-6, Amsterdam, 1988. この教科書はジョン・ロベックが新しく設立したセント・ポール校のために書かれた。

(77) "De copia", pp. 76-82. この著作は関川博士が次書を参照。J. Chomarat, *Grammaire et rhétorique chez Erasme*, 2 vols.,

- Paris, 1981, 2:712-61.
- (87) *Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterdami*, ed. P. S. and H. M. Allen, Vol. 7, Oxford, 1928, pp. 191-5 (Ep. 1885). 同年九月のフアン・テ・ヘルガラ宛書簡を参照。 *Ibid.*, pp. 163-8 (Ep. 1875).
- (89) ロングイユについては、次の文献を参照。 Th. Sinar, *Christophe de Longueuil, humaniste, 1488-1522*, Louvain, 1911, P. G. Bielenholz and Th. B. Deutscher, eds., *Contemporaries of Erasmus*, 3 vols., Toronto, 1985-87, 2:342-5.
- (90) 一五二六年五月(?)のアントニア・アルチャーチ宛書簡で、エラスムスはロングイユとの面会の模様を詳しく描写している。特に印象的だったのは、滞在中の三日間ロングイユが「食卓においておぼろげに一度として微笑むじむじまらなかつた」(nunquam vidi hominem vel leuiter subridentem, ne in conuiujs quidem) のことだ(Opus Epistolarum, ed. Allen, Vol. 6, Oxford, 1926, pp. 335-6 (Ep. 1706)).
- (18) 死の直後に書かれたロングイユの伝記(著者はレジナルド・ホウルとされる)によれば、彼は「(ケンボの)助言と權威とを非常に重視していたので、五年の間続けて……キケロただ一人を除いて、他のラテン語作家は手にとることさえせず、読むこともなかつた」(Cuius [sc. Petri Bembi] consilio et auctoritati tantum tribuit, ut quinque annos continuos... nullum alium authorem latinum in manibus haberet, nullum legeret, praeter unum Ciceronem) など(Christophori Longolij orationes duae..., Florence, 1524, [facsimile reprint, Farnborough, 1967], fol. 5 ro).
- (22) E. Dolet, *Dialogus de imitatione Ciceroniana, aduersus Desiderium Erasmus Roterdamum pro Christophoro Longolio*, Lyon, 1535. 解題に注釈を付した次の複製版がある。 *L'Erasmianus sive Ciceronianus d'Etienne Dolet (1535)*, ed. E. V. Telle, Geneva, 1974.
- (33) 完全な標題は『対話篇「キケロ主義者」または最もすぐれた弁論の方法について』(*Dialogus cui titulus, Ciceronianus, sive, De optimo genere dicendi*)。一五二八年三月の初版(Aと略記する)／一五二九年三月の第二版(B)／同年一〇月の第三版(C)／一五三〇年三月の第四版(D)はすべてハーゼルのフロレンス書店から公刊された。本論での引用には、次のアマステルダム版『全集』所収の批評校訂版を用いる。“*Dialogus Ciceronianus*”, ed. P. Mesnard, in *Opera Omnia Desiderii*

- Erasmii Roterdami*, Vol. I-2, Amsterdam, 1971, pp. 581-710 [以下で ASD と略記する]。(頁数と行数との双方を指示する場合) 629:23 のように表わす。)『キケロ主義者』には次のような一つの校訂版(イタリア語訳を付す)がある。*Il Ciceroniano o dallo stile migliore*, ed. A. Gambaro, Brescia, 1965. ASD は A のテクストを再現するごとくを校訂方針とし(“Introduction”, p. 585)一方 Gambaro 版はエラスムスの最終的な意図を表わす C・D の読みを主として選んでいる(“Prefazione”, pp. xiv-xv はこの方針を明確に述べてはいないが)。いずれの校訂版でも apparatus criticus を利用して、諸版の異読を参照するごとくが可能である。本論では、『全集』が広く普及していることを勘案して、ASD を底本とするが、いかなる事情からか、このテクストは誤写ないし誤植を大量に含んでいる。(ASD のテクストに対する評価としては、次の二論考を参照。)J. Isewijn, “Castigationes Erasmiannae”, *Humanistica Lovaniensia*, 27(1978), 302-4. Chomaral, *Grammaire et rhétorique chez Erasme*, 2815, n. 437.)そのため、ASD を A の大英図書館所蔵本 [C. 108, a. 13.] と校合し、その結果を「補遺」として本稿の末尾に付すこととした。ただし、前掲 Isewijn, “Castigationes Erasmiannae” 所収の正誤表ですべてに指摘されているものは省略し、句読点の異同については、本文解釈上意味のあるものを挙げるにとどめた。(補遺では、上記 ABCD に加えて、Gambaro 版に G の略号を用いる。)エラスムスの言語論全体における『キケロ主義者』の位置づけ・解釈としては、次書を参照。Chomaral, *Grammaire et rhétorique chez Erasme*, 2815-40. また、『キケロ主義者』の成立、他のキケロ主義論争との関係、その影響等に関し、Gambaro 版の有益な長文の「序論」を参照のこと。Gambaro, “Introduzione”, in *Il Ciceroniano*, pp. xix-cxii.
- (84) 古典ギリシヤ語にはこの語義はなから、Chomaral, *Grammaire et rhétorique chez Erasme*, 2816, n. 443 の解釈に従う。
- (85) 各部の区分を頁数にそれぞれ示せば、それぞれ次のとおり。ASD, pp. 606-16; pp. 616-57; pp. 657-702; pp. 702-10.
- (86) ASD, 606:18.
- (87) ASD, 613:27-8; 615:11-12; 615:20-2. もちろんこれは誇張された戯言だが、事実との照応もある。ロングイユやベンボが一通の書簡を執筆するのに長い時間をかけたことはよく知られていたし、キケロの語彙だけを集めて用例を指示した辞書は、実際にマリオ・ニッオーリオによって一五三五年に編纂されたのである。M. Nizolii *Observationum in M. Tullium Cice-*



*ronem prima [et secunda] pars*. Brescia, 1535. これは千二百頁を越す二折り判の大冊であるが、読者に歓迎されて、その後もしばしば版を重ねた。大英図書館には、この初版から一八二〇年ロンドン版に到る十三種の刊本が所蔵されている。Cf. Breen, "The Observations in M. T. Ciceroem of Marius Nizolius", *Studies in the Renaissance*, I (1954), 49-58.

(88) ASD, pp. 616-35; pp. 636-47; pp. 647-57.

(89) ASD, 617A.

- (90) これに対するノンボヌスの返答は、「論理に関する議論は傍に置いておこう、われわれは雄弁の力と徳について討論することをこのだから」(Missum faciamus sermonem de moribus de viribus ac virtutibus eloquendi nobis instituta est disputatio [ASD, 624:26-81]) というものである。個々の対応の指摘は省くが、これを含めて、第二部ではピロ＝ベンボ書簡との類似が著しい。Bに付された一五一九年一月のヨハン・フォン・フラッテン宛書簡で、エラスムスは『キケロ主義者』の初版刊行後に初めてピロ＝ベンボ書簡を読んだことを明言している(ASD, 604:13-605:3) が、この言葉をそのまま信じる必要はないだろう。第二部の(なかならず最初)のセクションの執筆の素材として、特にピロの書簡を利用した可能性は十分にある。とりわけピロ＝ベンボ書簡の一五一八年パーセル版が、エラスムスときわめて関係の深いフローベン書店刊であることを考えると、キケロ主義駁論の決定版を書こうとしたエラスムスがこの書物を参照しなかったとすれば、その方が不思議である。他方、明らかにベンボから採られた(前注(73)参照)、キケロの文体の適応性とウエルギリウスとの対照に関する章句がB以降の版に付加されていること(ASD, p. 648, app. crit. ad II, 19-20)は、エラスムスを信じる根拠になるかもしれない。エラスムスの主張をそのまま受け入れる Gambaro, "Introduzione", in *Il Ciceroniano*, pp. xlii-xliv は、クインティリアヌスやセネカなど、ピロとエラスムスの共通の典拠で両者の類似を説明するが、これはたとえば文献学的論法の類似を説明しない。
- (91) これはコルテージなどの「父親」=「子供」の比喩によるキケロ模倣の弁護の転用・批判である。前注(41)を参照。
- (92) ASD, 630:28-9; 630:29-31: "Si nostrum simulacrum, quo M. Tullium effingimus, careat vita, actu, affectu, neruis et ossibus, quid erit imitatione nostra frigidius?", 631:22. これが絵画的比喩に基づく模倣論そのものの批判になっていることに注目した。

- (35) ASD, 634:13-16.
- (36) ASD, 636:20-35, at 34-5: "quum vndiquaque tota rerum humanarum scena inuersa sit, quis hodie potest apte dicere, nisi multum Ciceroni dissimilis?" 古くローマの消滅という事実には、後段第三部においてより印象的に表現されている。「ローマは（もはや昔日の）ローマではなご。そこには、古の災厄の傷跡や足跡のような廢墟と瓦礫以外には、何もなごのだ。教皇、枢機卿、司教、教皇庁、その役人たち……を取り去ってしまえば、ローマは何が残らぬらうか。」(Roma Roma non est, nihil habens praeter ruinas ruderaque priscae calamitatis cicatrices ac vestigia. Tolle Pontificem, Card [inales,] Episcopos, Curiam, et huius officarios...quid erit Roma? [ASD, 694:4-9])。
- (37) ローマの宗教的弁論とヒトラスムスとルネサンスの評述について、次の論考を参照。L. Gualdo Rosa, "Ciceroniano o cristiano?: A proposito dell'orazione *De morte Christi* di Tommaso Fedra Inghirami", *Roma Humanistica, Humanistica Lovaniensia*, 34A(1985), 52-64.
- (38) ASD, 647:20-1. ヒトラスムの「キリスト哲学」(philosophia Christi) の本格的な表現として、一五二六年初版の『兼愛論書』校訂版に付した序言「ペラタレンス」を参照のよう。"Paraclesis", in Erasmus von Rotterdam, *Ausgewählte Schriften*, Vol. 3, ed. G. B. Winkler, Darmstadt, 1995, pp. 2-36.
- (39) ASD, 647:37; 649:24-5: "Quod si totum vis exprimere Ciceronem, teipsum non potes exprimere. Si teipsum non exprimis, mendax speculum tua fuerit oratio." この章句が、キリンジャーノの模倣論を継承して、「文章」＝「鏡」のように比喩を用いてそれを解釈・敷衍している。前注(38)を参照。
- (40) ASD, 650:18-26: "Qui pari studio sese exercebit in cognitione philosophiae Christianae, quo ille [sc. Cicero] se exerceuit in prophana...qui quod his omnibus studiis comparatum est, ad res praesentes accommodabit, is poterit aliquo iure Ciceroniani cognomen ambire."
- (41) ASD, 651:4-652:24. この章句も、そのキリンジャーノニヤネカの折衷主義的模倣論を受け継いでいる。前注(37) (38)を参照。

- (100) このリストはエラスムスによれば「副産物」(parergon)だが(一五二九年一月フラッテン宛書簡 [ASD, 601:12])、<sup>1)</sup>「リアの誉」たるキョーム・ビュデを人文主義者＝出版者ジョス・バードと比較したことでフランスの人文主義者たちの憤激を買っなど、思わぬ波及効果を生み、エラスムスはB以降の諸版で大幅な加筆訂正を余儀なくされた。他方で、書物の入手に便宜を図ってくれた無名の人文主義者の名前をB以降に加えていることから、リストがエラスムスの影響力の操作に役立ったことがわかる。 Cf. ASD, p. 683, app. crit. ad l. 8, L. Jardine, *Erasmus, Man of Letters*, Princeton, 1993, pp. 138-9.
- (101) ASD, 706:1-707:20. 結論として、<sup>2)</sup>「ホリッティマーンは思考内容と措辞との両方においてキケロに近づくことを述べるが (At Politianus...quanto melius Ciceronem exprimit...non tantum sententiarum argutia, verum etiam verbis aptis, elegantibus ac significantibus [707:15-18])<sup>3)</sup>、<sup>4)</sup>「ラフローズ全体にわたって、エラスムスのホリッティマーンへの強い共感ばかりが印象的である」。
- (102) ASD, 707:26-9: "Dicendi artifex optimus, atque etiam vt inter ethnicos vir bonus, quem arbitrator si Christianam philosophiam didicisset, in eorum numero censendum fuisse, qui...pro diuis honorantur."「ホリッティマーンと同様、<sup>5)</sup>エラスムスもキケロに敵意を抱いてはたわけではない。逆に、晩年のエラスムスは『義務について』(一五一九年)や『トゥスクルム談論』(一五二三年)の校訂版を作るなど、<sup>6)</sup>哲学者としてのキケロにますます傾斜を深めていった。 Cf. A. Rabl, Jr., "Desiderius Erasmus", in Rabl, *Renaissance Humanism*, 2:255-6.
- (103) ASD, 708:37.
- (104) ASD, 709:21-3: "Qui sic est Ciceronianus, vt parum sit Christianus, is ne Ciceronianus quidem est, quod non dicitur apte, non penitus intelligit ea, de quibus loquitur, non afficitur his ex animo de quibus verba facit"; 709:28-9: "Id non in verbis, aut orationis superficie, sed in rebus ac sententiis, in ingenio consilioque situm est."
- (105) Cf. Gambaro, "Introduzione", in *Il Ciceroniano*, pp. lxxxii-lxxxiii; D'Amico, *Renaissance Humanism in Papal Rome, passim*, esp. p. xvi.
- (106) 『キケロ主義者』の受容、その後の模倣論の展開については、それぞれ以下の文献を参照。 Gambaro, "Introduzione", in

*Il Ciceroniano*, pp. lxxxv-cviii; Simar, *Christophe de Longueuil*, ch. xi.

(97) 前注 (100) を参照。

(98) Cf. G. W. Pigman III, "Imitation and the Renaissance Sense of the Past: The Reception of Erasmus' *Ciceronianus*", *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 9, 2 (1979), 155-77.

(99) 当初の計画では、いろいろした問題は別にして、ヘラスムスへのキケロ主義者からの反響の例として、エティエンヌ・ドンを論ずる他に、キケロ主義のいわば「実践」として、マリオ・ニッシャーリオのキケロ主義的辞書編纂、ジョアシャン・ペリオによるアリストテレスのキケロ主義的ラテン語訳などを検討するはずであったが、本稿の紙数には到底収まらないことが判明した。これらについては、他日を期したいと思ふ。

### 補遺 『キケロ主義者』アムステルダム版テキストの正誤表

CORRIGENDA in editione Amstelodamensi "Ciceroniani" Erasmi quae sunt addenda

"Castigationibus Erasmi" J. IJsewijn (*Humanistica Lovaniensia*, XXVII [1978], 302-4)

(ex collatione editionis principis Frobenianae [exemplaris Bibliothecae Britannicae: C. 108. a. 13.] exceptis notatis\*)

ed. Amstelodamensis

ed. Frobeniana (A)

610:26

tempora, nomina

tempora, nomina

612:7

super est

superest

*612: n. ad ll. 14-17	<i>Aen.</i> 522-525	<i>Aen.</i> IV. 522-525
613:12	disciplinae. Magia	disciplinae, Magia
613:35	<i>ohe.</i> Quid	<i>ohe.</i> NOSOP. Quid
615:1	satis scripsisse	satis sit scripsisse
615:10	fruitur, codicibus	fruitur codicibus
616:10	anceps. Si	anceps: Si
616:16	amore. Nam	amore, Nam
619:1	ostendat	ostentat
620:6	Zeuxidis	Zeusidis
620:29	Plusquam praestantissimum?	<i>sic A, sed corrigendum:</i> Plusquam praestantissimum.
*620: app. crit. ad l. 26	<i>legit</i> suppellectibus	<i>legit</i> suppellectilem
622:11	videntur?	videntur.
622:12	solaecismis	soloeecismis
622:23	proferebantur	proferebatur
623:4	ñ	H
623:28	partem, excipis	partem excipis
625:17	Horatius	Oratius
625:29-30	<i>Friget... nostris?</i>	<i>imprimendum litteris romanis</i>
626:36	circum duxissent	circumduxissent

630:26	pictori, sunt	pictori sunt
630:35	circumspectabat	circumspectabat
632:20	fit	sit
633:19	alicubi, videri	alicubi videri
634:3	precipitii	praecipitii
634:18	differat	disserat
635:4	aussuetae	assuetae
*636: app. crit. ad l. 13 (in edd. <i>BCD</i> )		
	alienora	alieniora (cf. ed. <i>G</i> )
639:30	Augustinienses	Augustinenses
640:21	ille, fuit	<i>sic A, sed corrigendum:</i> ille fuit
641:25	Vtrum'ne	Vtrumne
641:38	<i>manumismi</i>	<i>manumissi</i>
643:3	quid, <i>inductio</i>	quid <i>inductio</i> ,
643:22	differere cuiusmodi	disserere, cuiusmodi
643:23	vertimus <i>fides</i>	vertimus, <i>fides</i>
643:25	loquendum prorsus	loquendum, prorsus
645:17, 646:4	Hannibal	Annibal
646:28-29	vtilitatis, proprie	vtilitatis proprie
*646: n. ad l. 19	<i>τὰ μὴ καλὰ</i>	<i>τὰ μὴ καλὰ καλὰ</i>

647:1	<i>sacrum</i> $\delta$	<i>sacrum: \delta</i>
647:17	obcoenitatis	obscoenitatis
647:25	re traho	retraho
649:25	exprimis mendax	exprimis, mendax
649:27	similes	simules
651:27	vnius praescriptum	vnius lectione desedit, si se ad vnius praescriptum
652:9	doctinarum	doctrinarum
652:24	pasta. Veniamus	pasta. (BVL.) Veniamus
654:15	Eloquentia, quae	Eloquentia quae
655:3	Frigidus	Frigidius
655:9	orationem	oratore
656:32-33	qui...commune	<i>imprimendum litteris italicis</i>
658:4	Gallicanum. Trebellium	Gallicanum, Trebellium
658:7	Aemilius	Aemilius
659:9	doctrina	doctrinam
659:24	aeterna	<i>sic A, sed corrigendum cum edd.</i> <i>BCD: aeternae (cf. ed. G)</i>
659:33	$\alpha\upsilon\theta\iota\varsigma$ $\alpha\upsilon$	$\alpha\upsilon\theta\iota\varsigma$ $\alpha\upsilon$
661:17-18	manibus ingenium	manibus: ingenium

	*664: app. crit. l. 5 (in edd. <i>CD</i> )		
		huius, palmae	huius palmae (cf. ed. <i>G</i> )
665:1		Sumouebis	Submouebis
			[Summouebis: IJsewijn]
665:4		parcius; Morum	parcius; Morum
667:4		Bartholomaeum	Bartholomeum
671:11-12		ipsa se nos	<i>sic A, sed 'se' delendum est</i>
686:4		defecturi?	defecturi.
	*691: app. crit. l. 3 (in edd. <i>BCD</i> )		
		desiderio	desidero
696:19-20		adolescentiae, studiis	adolescentiae studiis
696:22		habes orationes	habes, orationes
700:23-24		scripsis: <i>piscatorias</i>	scripsit <i>piscatorias</i>
700:29		inuocare. Musas	inuocare Musas
700:30		Sybyllinis	Sibylinis
	*700: app. crit. ad l. 30 (in edd. <i>BCD</i> )		
		Quod	Quid (cf. ed. <i>G</i> )
701:10		Atqui	Atque
702:8		operae	<i>sic A, sed corrigendum: opere</i>
*702:13		<i>geminentur tigribus</i>	<i>geminentur(&gt;) tigribus</i>



702:19	eruditam	eruditum
703:7	Horatius	Oratius
703:28	Horatio	Oratio
704:9	temperatus, est	temperatus est
705:17	Nosopone	Nosopono
706:6	adolescente, feram	adolescente: feram
706:7	qui ferat	quis ferat

“Castigationes” CASTIGANDAE

	<u>IJsewijn</u>	<u>ed. Frobeniana</u>
638:17	viri qui suis	viris qui suis
656:18	Ciceronianos	Ciceroniano